

理解を深めたい方へ

危険を予測し回避する能力を育てる
**地域安全マップづくり
指導マニュアル（詳細編）**

平成 28 年 10 月



東京都

目 次

ページ

1	子供が犯罪被害に遭わないために	1
2	犯罪の発生を防ぐためには	1
3	地域安全マップとは	1
	☆POINT 犯罪が起こりやすい場所とは	2
4	地域安全マップづくりの流れ	5
5	指導の進め方	6
(1)	準備作業	6
ア	教員の事前学習	6
イ	指導案の作成	6
ウ	調査エリアの設定	6
エ	調査ルートを選定	6
オ	補助員の確保	6
カ	道具の準備	7
(2)	STEP 1 事前学習	7
ア	会場設営	7
イ	指導手順	8
(ア)	犯罪のイメージ	8
(イ)	犯罪者のイメージ	8
(ウ)	犯罪に遭わないために	8
(エ)	犯罪が起こりやすい場所とは	9
(オ)	指導教材 DVD「景色で学ぼう！ 新・地域安全マップづくりDVD」	9
(カ)	効果的な指導例	10
ウ	班編成	19
エ	フィールドワーク上の注意事項	20
(ア)	学習指導上の注意	20
(イ)	安全管理上の注意	21
(ウ)	プライバシーの配慮等	21
(エ)	時間管理等	21
(3)	STEP 2 フィールドワーク	22
ア	各自の具体的な役割	22
イ	まちの中のチェックポイント	23
ウ	補助員の役割、注意事項	31

(4) STEP 3 マップ作製	34
ア 作業手順	34
(ア) 全体レイアウト、表題記入（デザイン化）	35
(イ) 写真選び	36
(ウ) コメント作成	36
イ 補助員の役割	38
(5) STEP 4 発表会	39
ア 発表会の手順	39
イ 参加者	40
ウ まとめ	40
☆POINT 低学年への指導方法	41
○ 役割分担	41
○ わかりにくい言葉、写真撮影	41
○ 事前学習	41
① 体験学習	42
② 見えにくい場所	43
③ 高学年の子供が作成したマップを見せる	43
○ フィールドワーク	43
○ マップ作製	45
○ 発表会	46
○ まとめ	46
6 学校での授業指導案例	47
☆POINT 地域安全マップづくりの理論的根拠	57
7 地域安全マップづくりの効果	63
(1) 犯罪未然防止	63
(2) 非行防止	63
ア 人との絆	63
イ 社会との絆	63
ウ 未来との絆	64
(3) 学校、保護者、地域の連携促進	64
ア 保護者（PTA）との連携	64
イ 地域（ボランティア）との連携	64
8 大東京防犯ネットワーク	66

※授業は、「総合的な学習の時間」や「特別活動」の時間を活用するほか、小学校3・4年社会科の「地域の人々の安全を守るための諸活動（地域の安全）」や「身近な地域の様子（学校のまわり）」の単元と組み合わせて実施することもできる。

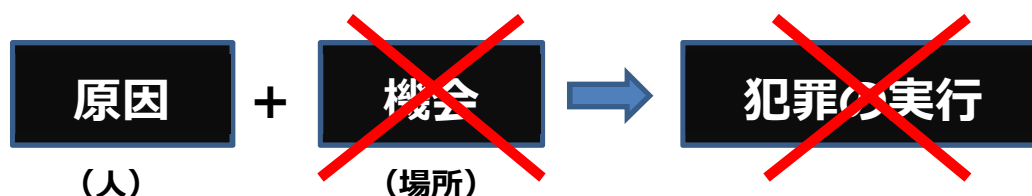
1 子供が犯罪被害に遭わないために

都内の各地域では、子供を犯罪から守るため、町会や自治会などの地域団体のほか、防犯ボランティア、学校、警察、行政等が連携して見守り活動を行っているが、子供が安全に安心して生活するためには、子供自身も犯罪に遭わないための能力を身に付けることが必要である。

2 犯罪の発生を防ぐためには

子供が犯罪に遭わないための取組として、防犯力の強化が頭に浮かぶ。防犯の考え方には犯罪原因論と**犯罪機会論**（58 頁参照）があり、前者は犯罪が発生してから犯罪の原因を追及し、その原因を取り除こうとする考え方であるのに対し、後者はどのような原因がある人でも、犯罪の機会さえ奪ってしまえば犯罪は実行できないという考え方である。欧米では、1970 年代まで犯罪者に焦点を合わせ、その異常な人格を改善しようとする犯罪原因論が主流だった。しかし、原因の究明は困難であり、仮に原因が解明できたとしてもそれを除去するプログラムを開発することは一層困難で、犯罪を減少させることはできなかった。このため犯罪の実行に都合の良い状況は与えないとする犯罪機会論が採用されるようになった。

地域安全マップづくりは、犯罪機会論を理論的根拠とし、犯罪が起こりそうな場所に着目する。子供の景色解読力を高め、子供が安全な場所と危険な場所を判断できるようにし、注意して行動するように指導する。



3 地域安全マップとは

地域安全マップは、「犯罪が起こりやすい場所」を風景写真を使って解説した地図である。子供はマップづくりを通じて景色解読力を高め、危険な場所には近づかない、又は警戒するようになる。こうすることで、犯罪者から犯行の機会を奪う。

マップを作製する過程で子供はフィールドワークを行い、通学路等を点検する。「犯罪が起こりやすい場所」では写真も撮り、マップにはその写真を貼り、なぜ危険な場所と考えたのか、その理由を考えさせる。

景色解読力を身に付けることが目的であるから、場所の特定には意味がない。

したがって、マップはフリーハンドで、大まかなものを作る。

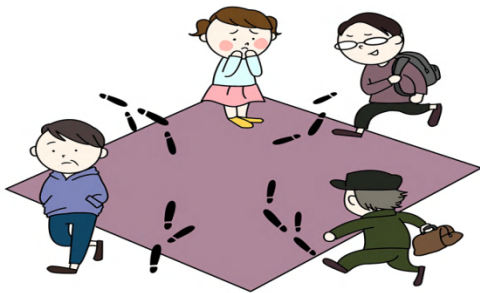
安全マップの中には、実際に犯罪が発生した場所を示す犯罪発生マップや不審者が出没した場所を示す不審者マップもあるが、これらは子供の景色解読力の向上には役立たない。



子供の作品例

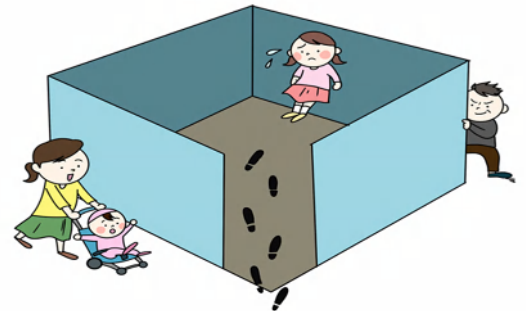
☆POINT！ 犯罪が起こりやすい場所とは

犯罪が起こりやすい場所とは、**(誰もが) 入りやすく、(誰からも) 見えにくい場所**である。



入りやすい場所

犯罪者は、怪しまれることなく、簡単に子供に近づく、犯罪者が好む危険な場所である。



見えにくい(見られにくい)場所

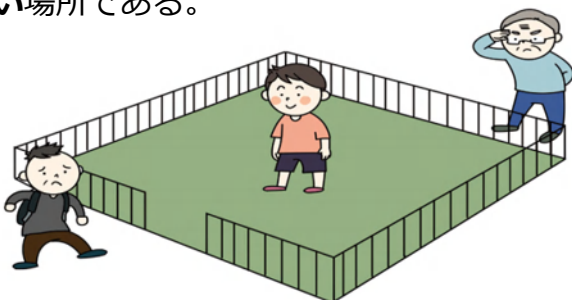
犯行が目撃されにくく、発見・通報されることがなさそうな、犯罪者が好む危険な場所である。

★覚えよう！ 犯罪の起こりやすさを見分ける “魔法のキーワード”

(誰もが) 入りやすい

(誰からも) 見えにくい

他方、犯罪が起こりにくい場所とは、**(誰もが) 入りにくく、(誰からも) 見えやすい場所**である。



安全

入りにくく見えやすい場所

犯罪者が子供に近づきにくく、周囲の人からの視線（関心）があるため、犯罪を行いにくい場所である。

地域安全マップづくりでは、この2つのキーワードを用いて、安全な場所と危険な場所を判断する。通学路のような日々通っている場所だけでなく、初めての場所でも、このキーワードを用いると安全と危険の区別ができるようになる。

その上で、犯罪が起こりやすい場所では、以下の「安全のための注意事項」を守り、犯罪に遭わないように指導する。

～安全のための注意事項～

- ・ 犯罪が起こりやすい、危ない場所へは近づかない。
- ・ やむを得ず、危ない場所を通らなければならないときは、保護者や友達等複数で行くようにする。独りでは行かない。
- ・ 一緒に行く人はいないが、どうしても危ない場所を通らなければならないときには周囲の様子に注意して通るようにする。

地域安全マップづくりにより、子供一人一人の注意力を高め、犯罪者から犯行の機会を奪う。これにより子供への犯罪を防ぐ。

<過去に子供が被害に遭った場所の景色>

(誰もが) 入りやすい場所の例



小学校の正門

門が開いていたため、犯人が侵入。授業を受けていた子供 20 人を殺傷、教員 2 人も受傷した。



植栽のない道路

下校中の小 1 女児が、植栽のない場所に停止した車から声をかけられ乗車。犯人宅で殺害され、翌日発見された。

(誰からも) 見えにくい場所の例



団地の 1 階部分

幾つもの壁が視線を遮り、子供への声掛けや連れ去りを見えにくくした。複数の子供を騙して連れ去り殺害した犯人も事前に犯行現場を調べしていた。



スーパーのトイレ

女子トイレに向かった3歳女児が店舗内の奥まった場所にある多目的トイレで殺害され、同夜他の場所で発見された。



駅前広場

日中、通行人が多く、その場にいる一人一人の関心が拡散している（心理的に見えにくい）中で、2歳女児が連れ去られ重傷を負った。



4 地域安全マップづくりの流れ

準備作業

指導計画を作成し、対象学年やクラス、担当教員、補助教員等を明確にするとともに、保護者等への協力を依頼する。
(地元警察署のスクールサポーターにも協力を求める。)

複数の調査エリアを定める。

フィールドワークやマップ作製に必要な消耗品等を用意する。

STEP 1

事前学習

危険予測に必要なことは「人」ではなく、「場所」であることを教える。

「入りやすく」「見えにくい」というキーワードを教える。

フィールドワーク時のグループ編成をし、役割を分担し、その役割を確認する。

フィールドワークに出る際の注意事項を伝える。

STEP 2

フィールドワーク

子供が自ら危険予測ができるようになるよう、キーワードをもとに景色解読力を高めるヒントを与える。
(答えはすぐに教えないように注意する。)

犯罪が起こりやすい場所、起こりにくい場所の写真を撮る。

地域の人にインタビューを行い、社会性を養う。

STEP 3

マップ作製

子供が歩いた調査ルート of 街並みをフリーハンドで描く。

フィールドワークで撮影した写真を貼る。

犯罪が起こりやすい(起こりにくい)場所と考えた理由をキーワードを使ってコメントに書く。

STEP 4

発表会

調査ルート上の犯罪が起こりやすい(起こりにくい)場所について、キーワードを使って説明する。

* みんなで意見や感想を伝え合うことにより、理解を深める。

* 下級生に向けて発表すると、次年度以降の取組につながる。

学習したことを振り返り、「安全のための注意事項」について指導する。

5 指導の進め方

(1) 準備作業

ア 教員の事前学習

- ・本マニュアルを読み、地域安全マップづくりの理論的根拠とねらい、効果、「犯罪が起こりやすい場所」やその対処等についての指導方法等を理解する。

イ 指導案の作成

- ・実施日時や対象学年、参加する子供の数、具体的なカリキュラム等を定めた指導案を作成する。
- ・複数の学級で実施する場合は、教員が相互に協力して指導案を作成する。
- ・副校長等に相談し、学校安全計画や年間指導計画に盛り込む。

ウ 調査エリアの設定

- ・フィールドワークを行う調査エリアを班の数に応じて設定する。
- ・社会科の「まち探検」等で使用する地図を用意する。
- ・エリアは、通学路を中心に1時間程度で学校と往復できる範囲で設定する。
ただし、すべての通学区域を含める必要はない。また複数の班が同一のエリアでフィールドワークしても差し支えない。
- ・可能であれば、一つのエリアに一つ以上の公園を含めると良い。

エ 調査ルートを選定

- ・調査ルートは、原則として、班長である子供が地図を見て歩きながら考えるが、教員があらかじめ調査ルートを選定しておくことにより、短時間でかつ効率的なフィールドワークが行えるようになる。
- ・教員があらかじめ「入りやすい」「見えにくい」を意識しながら地域を歩き、犯罪機会論の視点で、その地域の危険（安全）なポイントを把握する。またインタビューが可能な家も確保する。それらの情報を補助員へ提供することにより、すべての子供に同一レベルの学習効果が期待できるようになる。

オ 補助員の確保

- ・各班に補助員を配置する。班内の子供の人数にもよるが、複数の補助員を配置することが望まれる。
- ・補助員には、子供の保護者やPTA関係者、スクールサポーター（警察署）のほか、日頃学校とつながりのある地域ボランティア等へ協力を求める。
- ・補助員には、事前に地域安全マップづくりに関する資料を提供するとともに、子供への事前学習にも参加してもらい、理解を深めていただくと良い。



カ 道具の準備

地域安全マップづくりに必要な以下の道具等を用意する。

	道 具	数の目安	備 考
事前学習	ホワイトボード・黒板	1～2台	指導用、専用マーカー（2色）
	DVDプレーヤー・モニター	1セット	教材DVDの使用
フィールドワーク	デジタルカメラ	班の数	写真係が使用
	地図	班の数×3	班長、地図係、補助員に配付
	筆記用具	－	各自持参（鉛筆、消しゴム等）
	メモ用紙	班の数	インタビュー係が使用
	バインダー	参加人数分	地図係、インタビュー係が使用
	腕章又はビブス		学習中であることを示す
マップ作製	カラープリンタ	1台	職員室の備品でも可
	印刷用紙	班の数×10	写真を印刷する
	模造紙	班の数	マップとして使用
	はさみ		写真等を切り取る
	のり又はテープ		写真等を貼りつける
	3色の付せん ×各40枚		・コメントが記入できるサイズ （7.5cm×7.5cm） ・「赤色は危険、青色は安全」等
	新聞紙		机や床を汚さないための下敷き
	折り紙		色画用紙も可
	多色ペン		色鉛筆も可
発表会	マグネット		完成したマップをボードに掲出

(2) STEP 1 事前学習

ア 会場設営

事前学習では、子供に、これからどのようなことを学ぶのか、地域安全マップとはどのようなものかについて指導する。一つの学級であれば教室で、複数の学級が合同で行うのであれば、体育館やランチルーム、視聴覚室など多少広めの会場を用意する。ご協力いただく補助員の方が相当数いる場合、子供の後方で一緒に学習する。

教材の DVD を使用するのであれば、再生プレーヤーやモニターが必要である。またホワイトボードを利用し、文字や絵を書きながら指導すると子供の理解度も高まる。

イ 指導手順

(ア) 犯罪のイメージ

指導は、発達段階に応じて、内容や手法を変えることが肝要である。どの場合も初めに「犯罪には、どのようなものがあるか、わかる人?」と尋ねることから始めると良い。



中学年以降であれば、「殺人や強盗、すり、万引き、痴漢」など、様々な返答があるかもしれないが、路上で知らない人から突然「声を掛けられる、つきまといられる」などの行為も、性犯罪の前兆事案として注意するよう指導する。

そして「そのような怖い思いをしないためには、どのようなことに気を付ければよいのか。そのことをこれから一緒に考えてみましょう。」と話しかける。

事前学習では、子供と会話のやりとりをしながら進めるのが良いでしょう。



(イ) 犯罪者のイメージ

次に、子供がイメージする犯人像について確認する。左のイラストを見せて、犯人に見えるのは誰でしょうと尋ねる。優しいおねえさん、おじさん、おばさん、怖そうな人など様々ないるが、多くの場合、子供は「サングラス着用者やタバコをくわえている若者」を選ぶでしょう。しかし、

答えは「見た目ではわからない。」。子供から様々な返答やその理由を聞いておくが、そのほとんどが「怖い」「悪いことをしそう」「変な人」など、見た目で判断したものである。その場合、犯行が見つからないように用意周到に犯罪を計画している者には騙されてしまう。大切なことは「人に着目しては、犯罪から逃れることができない」ということである。それでは、何に着目すればよいのか。

(ウ) 犯罪に遭わないために

犯罪に遭わないためには、「場所」に着目し、犯罪が起こりそうな場所には近づかないように指導する。ただし、犯罪が起こりそうな場所とは、過去に犯罪が発生した場所でも、不審者が発生したと言われる場所でもない。

注意すべきもの

人 × 場所 ○

犯罪が起こりやすい場所には共通点がある。そのポイントをよく指導し、児

童がまちの景色を見て、安全又は危険の判断ができるようにする。地域安全マップづくりの目的はマップ作製ではなく、子供が犯罪に遭わないよう景色解読力を養うことである。

(I) 犯罪が起こりやすい場所とは

次に、「犯罪が起こりやすい場所」を見分ける方法を指導する。

犯罪者が好きな場所、それは、「(誰もが) 入りやすい」「(誰からも) 見えにくい」場所である。

「入りやすい場所」とは、子供を連れ去ろうと思っている人が誰からも怪しまれずに、簡単に子供に近づくことができる場所のことである。入りやすいは、逃げやすいにも通じている。

また「見えにくい場所」とは、例えば、周囲が高い塀や木で囲まれている公園は、誰からも見てもらえない見えにくい場所である。犯罪者は誰にも気付かれることなく子供に近づき、警察に通報されることなく子供を連れ去ることができる。こうした公園では、落書きやごみの放置も増えやすくなる。地域の人の関心が薄い公園は、心理的にも見えにくい公園と言える。

★★犯罪が起こりやすい場所や起こりにくい場所のキーワード★★

- 「入りやすい」場所と「見えにくい」場所
→ 犯罪が起こりやすい（危険な場所）！
- 「入りにくい」場所と「見えやすい」場所
→ 犯罪が起こりにくい（安全な場所）！

入りやすい場所

犯罪者が怪しまれることなく、簡単に子供に近づける場所

見えにくい場所

犯罪が目撃されにくく、発見及び通報されることがなさそうな場所

(オ) 指導教材 DVD「景色で学ぼう！ 新・地域安全マップづくりDVD」

事前学習の時間はおおむね1時間程度である。その中で「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを用いて、子供に犯罪が起こりやすい危険な場所を理解させる必要がある。学年により指導方法は異



なるが、アニメや写真をたくさん使用した指導教材 DVD を使うと理解が進みやすいと思われる。

都が作成した DVD の上映時間はおよそ 16 分である。項目ごとにチャプターで区切られているので、適宜ご活用いただきたい。

(お問合わせは、安全・安心まちづくり課 03-5321-1111 内 21-772 まで)

※DVDの映像は、「大東京防犯ネットワーク」で閲覧できる。

http://www.bouhan.metro.tokyo.jp/02_learn/03_map/map_movie.html

【DVD の構成】

<本編>

- 1 オープニング
- 2 アニメによる犯罪が起こりやすい場所
- 3 住宅街 ～危険な景色・安全な景色～
- 4 道路 ～危険な景色・安全な景色～
- 5 公園 ～危険な景色・安全な景色～
- 6 エンディング

<発展編>

- 7 繁華街 ～危険な景色・安全な景色～
- 8 駐車場 ～危険な景色・安全な景色～



(カ) 効果的な指導例

・写真の活用

写真は、景色の再現である。どのような景色が、なぜ危険と考えられるのか、具体的な例を示し、理由を説明しながら理解度を深める。



<トンネル>



トンネルは、両側の出入り口から入ることができるので、誰もが「入りやすい」、中は壁に囲まれているので、周囲に家があっても誰からも「見えにくい」場所である。

だから危険な場所である。

<建物の間の路地>



建物が林立する東京では、写真のような場所が多く存在する。こうした場所は扉などがないので誰もが「入りやすい」、両側に窓がないので誰からも「見えにくい」場所で、屋根のないトンネルとも言える。

だから危険な場所である。

<地下道>



東京のような都市では地下道が多く存在する。こうした地下道は出入り口を含め、トンネルと同様、誰もが「入りやすい」、壁に囲まれているので、誰からも「見えにくい」場所である。

だから危険な場所である。

<1階が車庫の家が並ぶ道路>



東京では1階が車庫という戸建住宅が多く存在する。こうした家が両側に並ぶ道路は、生活空間が2階となるため、歩行者の姿が見えない。1階部分は塀が並ぶのと同じ構造なので、誰もが「入りやすい」、誰からも「見えにくい」場所である。

だから危険な場所である。

<樹木に囲まれた公園>



公園は住民の憩いの場として樹木が多く存在する。大人の身長程度の高さの樹木が公園の周囲に密集している公園は、ブロック塀に囲まれた公園と同じで、公園の周囲から中が見えない。誰からも「見えにくい」場所である。

だから危険な場所である。

<階段の踊り場>



マンションや団地の踊り場の中には、写真のようにそこにいる人が見えない構造のものが多く存在する。こうした場所は、誰もが「入りやすい」、壁が多く死角になりやすいので、誰からも「見えにくい場所」である。

だから危険な場所である。

*踊り場の壁面は柵状のものが望ましい。

<駐車場>



周囲にフェンスがなく、入口にチェーンがない駐車場は、誰もが「入りやすい」場所である。だから危険な場所である。

写真のように、落書きがある駐車場は管理者の注意が行き届かない場所であり、心理的に「見えにくい」場所とも言える。

*駐車場は犯罪者の待機場所になりやすいので要注意である。

<駐輪場>



自転車を出し入れする駐輪場は誰もが「入りやすい」場所である。写真のように、塀に囲まれた駐輪場は、誰からも「見えにくい」場所である。だから危険な場所である。

*落書きのある駐輪場は心理的にも「見えにくい」場所になるため要注意である。

*物理的に「入りやすい」場所は、目をつぶって進んでも、また後ろ向きに進んでも入ることができる、フラットで障害物のない場所とイメージさせると、子供にも伝わりやすい。



★★★見えにくい場所の4類型★★★

<物理的に見えにくい場所>



「死角」

写真のような塀や樹木、構造物等に囲まれている場所は、周囲の人に見てもらいにくい場所である。

こうした場所を通るときは、十分に注意するように指導する。



「視線がない場所」

写真のように周囲に田畑が広がる場所は、人の視線が届かない「見えにくい」場所である。上の写真と比べて、物理的な障害物はないが、周囲に見てくれる人もいない。

こうした場所を通るときは、十分に注意するように指導する。

<心理的に見えにくい場所>



「地域が無関心な場所」

写真のように、塀に落書きがされていたり、ごみが放置されている場所は、地域が無関心な、心理的に「見えにくい」場所である。

犯罪者は仮に犯行が見つかって通報されないだろうと考える危険な場所である。



「不特定多数の者が集まる場所」

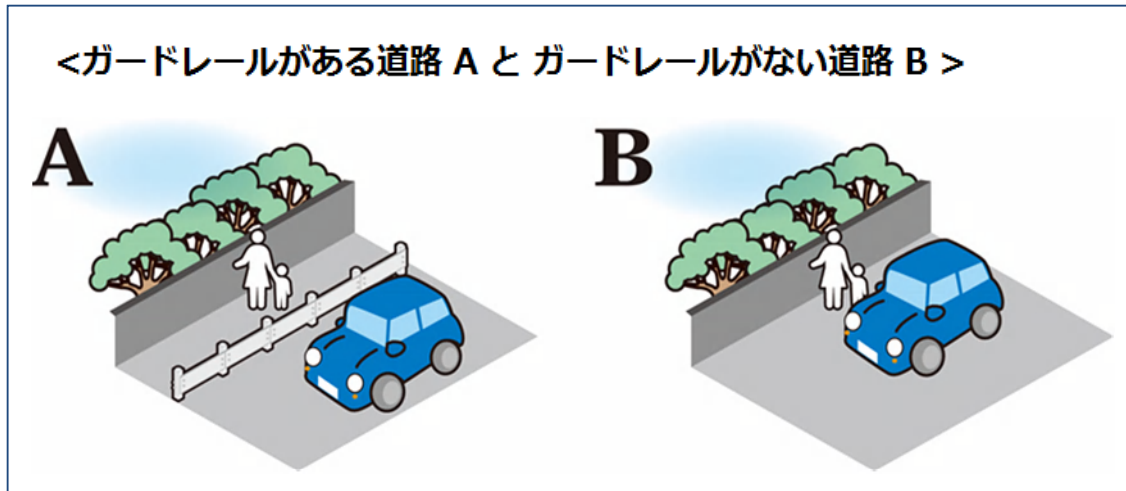
写真のように、不特定多数の人が集まる駅前広場等の場所では、その場にいる一人一人の関心や注意は拡散してしまうので、実は心理的に「見えにくい」場所である。

大勢の人がいるから安心と考えるのは誤り。こうした場所では注意が必要である。

・学習指導事例（クイズで子供の理解度を確認）

「犯罪が起こりやすい」危険な場所とそうでない場所の絵のコピーを配布するか、黒板に図示することで、犯罪者が現れそうな危険な場所はどちらか、なぜそう考えるのかを子供に質問する。ポイントは「なぜそう考えるのか」をたくさんの子供に発言させること。

そのとき「入りやすい」「見えにくい」という二つのキーワードを使って考えることを促す。



【質問例】

子供を車で連れ去ろうと考える犯罪者は、AとBどちらの場所に現れると思いますか。その理由も考えてください。「入りやすい」「見えにくい」のキーワードを使って考えてみましょう。

【回答例】

答えは B です。

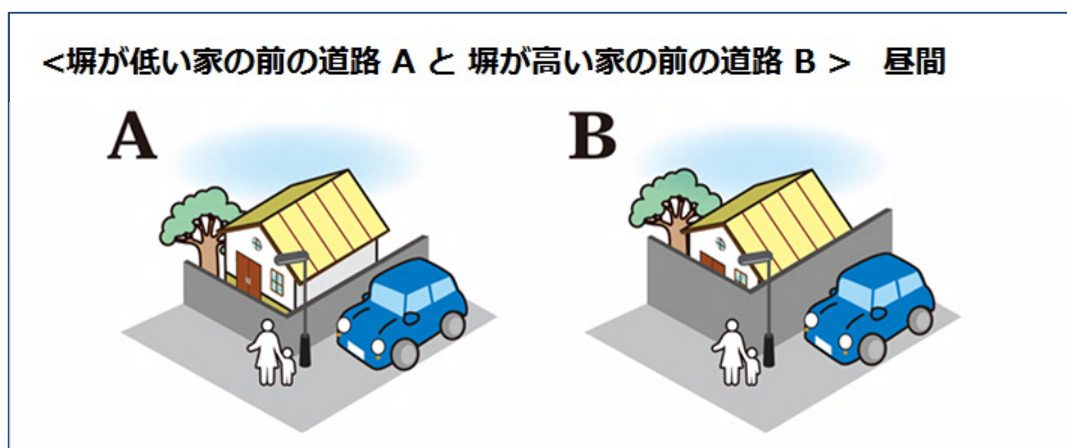
理由は、Bの道路にはガードレールがないため、車両を利用する犯罪者が子供に容易に近づくことができます。歩道スペースに「入りやすい」ので、危険と考えます。

（解説）

犯罪者は子供を連れ去るため、子供が知っているであろう「学校（公園）までの道を教えて。」とか「お父さん（お母さん）が怪我をして病院へ運ばれたから一緒に来て。」と話して子供を車に乗せようとする。

子供が躊躇していると、無理やり引きずりこむかもしれない。そのようなとき、Aの道路ではガードレールが邪魔をして車のドアが開けづらくなる。交通安全上もガードレールは子供を守ってくれる。ガードレールのある道路ではガードレールの内側を歩くように指導する。

ただし、ガードレールにも切れ目はある。ガードレールとガードレールの間に車が停車して話しかけられた場合は十分に注意するよう指導する。



【質問例】

今度は、A にも B にもガードレールはありません。ただし、家の塀の高さが違います。子供を車で連れ去ろうと考える犯罪者は、A と B どちらの場所に現れると思いますか。

【回答例】

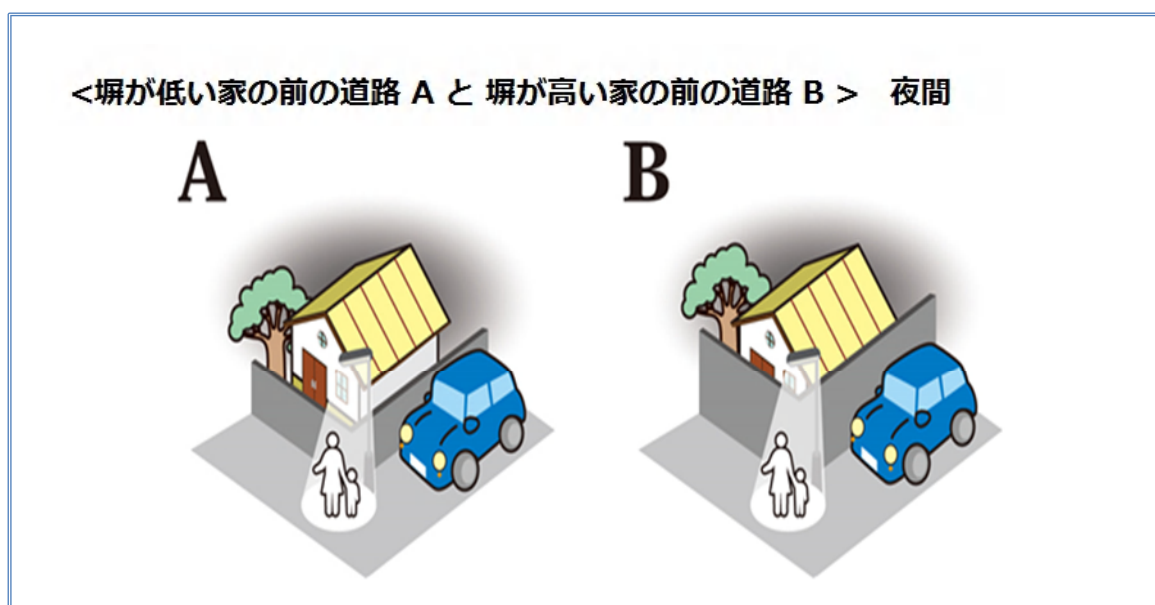
答えは B です。

理由は、B の道路にある家の塀は子供よりも高く、家の中の人から見てもらえない「見えにくい」場所です。犯人が子供に近づき連れ去ろうとしても、その様子が見てもらえない危険な場所と考えます。

（解説）

犯罪者は犯行を見られる、そして警察へ通報されることを嫌う。

このため、周囲からの視線が少ない場所を好む。B のような家が並ぶ住宅街の道路を歩くときは十分な注意が必要なことを指導する。



【回答例】

先ほどと同じ場所ですが、今度は夜の設定です。Aの場所にもBの場所にも照明が点きました。さて、犯罪者の車はどちらの場所に現れると思いますか。

【正解例】

答えは B です。

理由は、照明が点いたとしても、Bの家の塀は子供よりも高く、家の中の人から見てもらえない「見えにくい」場所であることに変わりがないためです。

（解説）

「照明が点くと安心」と考える人も多いが、照明は夜の景色を昼の景色に戻すだけである。昼間危険と考えられる場所に、夜間照明を点けても危険な場所であることに変わりがない。「見えにくい場所」は犯罪が起こりやすい危険な場所である。



【質問例】

次に公園です。公園の大きさ、設備は同じであって、Aは公園の周囲が塀、Bは柵です。さて、犯罪者はどちらの公園に現れると思いますか。

【回答例】

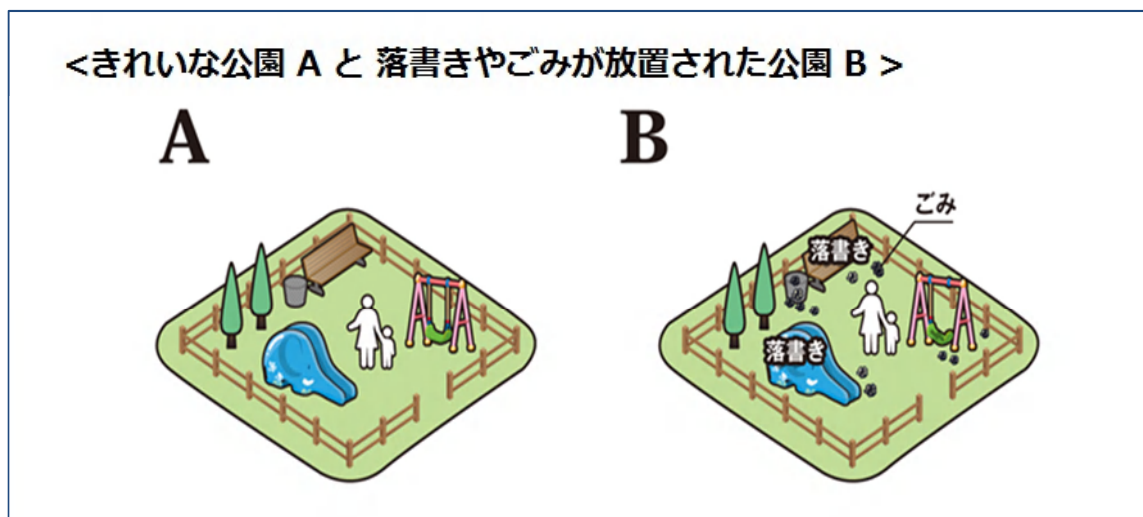
答えは A です。

理由は、Aの公園の周囲は塀で囲まれているため、周囲の人から見てもらえない「見えにくい」場所であるからです。それに比べ、Bの公園は柵でできているため、周囲から中の様子が見通すことができます。「見えやすい」公園は犯罪者が嫌います。

（解説）

この事例では塀を使って周囲からの視線が届かないことを説明したが、公園の周囲に低木が隙間なく植樹されている場合も同様のことが言える。

公園は憩いの場として緑がたくさんあるが、防犯の視点で考えた場合、低木は間を空けて植樹し、高木は周囲の窓からの視線を遮断しないよう剪定するのが良い。



【質問例】

次は、先ほどの良好な公園をベースに、公園の管理状況に違いを設けました。A の公園は整然としていますが、B の公園はベンチに落書きがあり、ごみもあふれて、他に散らばっています。さて、犯罪者はどちらの公園に現れると思いますか。

【回答例】

答えは B です。

理由は、B の公園には落書きがあり、ごみも放置されています。つまり、しっかり管理されていない状況にあります。こうした場所は地域の方の関心が薄いので、仮に犯行を見られても通報まではされないだろうと犯罪者は考えます。地域の人に見てもらえない「見えにくい」公園であり、犯罪が起こりやすい場所と考えられます。

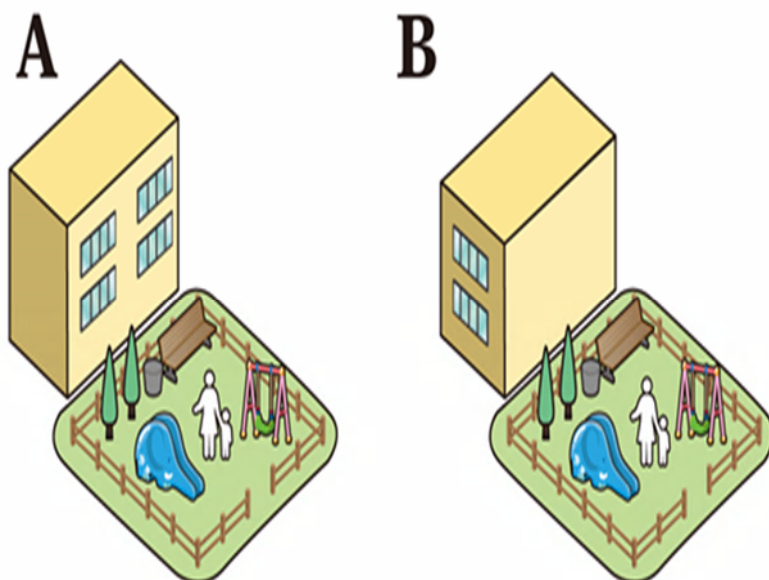
（解説）

アメリカの犯罪学者ジョージ・ケリング氏が考案した環境犯罪学上の「割れ窓理論」では、建物の壊れている窓を放置することは、誰も注意を払っていないという象徴となり、やがて他の窓も全て壊されてしまうと考えられている。つまり、凶悪犯罪を含む犯罪抑止のためには、軽微な犯罪を徹底的に取り締めることが重要としている。

「落書きとごみ」が放置されている状態は、地域の「領域性」や「監視性」が低い証拠である。縄張り意識が感じられないので、犯罪者は警戒心を抱くことな

く気軽に立ち入ることができる「入りやすい」場所である。また当事者意識も感じられないので、犯罪者は「犯行を実行しても見つからないだろう。」「仮に見つかったとしても警察に通報されないだろう。」と思う、心理的に「見えにくい」場所である。

＜隣接するマンションの窓が公園を向いている A と 向いていない B ＞



【質問例】

最後に、公園の状況は全く同じで、隣接するアパートやマンションなどの住宅の向きが異なる2つの公園を比べます。Aの公園とBの公園、犯罪者はどちらの公園に現れると思いますか。

【回答例】

答えは B である。

理由は、Bの公園に隣接する建物の窓が公園側を向いていないため、公園の様子は見てもらえない、「見えにくい」場所となっていることです。建物の公園側は巨大な壁となっており、犯罪者が犯行を行うのに好都合です。それに比べてAの公園は、建物の窓が公園側に向いていて、公園の様子を見てもらえます。犯罪者からすると、いつも見られている、又はいつ見られるか分からない「見えやすい」状態にあります。

（解説）

公園に隣接する建物の窓の向きはとても重要である。犯罪者は常に視線の有無を気にしている。特にベランダに洗濯物や植栽があると、いつ出入りするかわからないため犯行がやりづらくなる。

ただし、公園の周囲に植栽が多い公園は、建物からの視線を遮ってしまう。こうした公園では、季節により景色が変わることもあるので注意するように指導する。

ウ 班編成

- ・ 1 班の人数は 5 ～ 7 名を基本とし、教員が班編成と役割分担を決める。
- ・ 役割は班長、副班長、地図係、写真係、インタビュー係であり、すべての子供に参加意識を持たせるように全員に分担させる。
- ・ 子供の数が 6 名以上の場合は、地図係やインタビュー係を複数で行う。

班長 	・ 班の代表者であり、班員の行動をまとめる役割を担当する。 ・ フィールドワークでは、調査ルートを考える。 ・ 適宜、犯罪が起こりやすい場所で立ち止まり、班員へこの場所は安全か危険かの意見を求める。 ・ 犯罪が起こりやすい場所では、地図係と写真係へ指示する。 ・ インタビューする地域住民を見つけ、インタビュー係へ指示する。
副班長 	・ 班長を補佐し、各班員の取組状況を確認する。 ・ 班員が交通事故に遭わないよう、自動車や自転車等が接近してきたとき、班員に対して大きな声で注意を喚起する。
地図係 	・ 犯罪が起こりやすい場所と判断された場合、その場所と判断理由を地図に記入する。 ・ インタビューした場所も記入する。 ・ マップ作製時に、とても重要な資料となるので、きちんと記録するようにする。
写真係 	・ 犯罪が起こりやすい場所と判断された場合、プライバシーに配慮しながら、その景色を撮影する。 ・ 写真はアップになりすぎないように、景色全体を写すようにする。

インタビュー係 	・地域住民の方へ、被害に遭うかもしれないと不安に思う場所とその理由について、インタビューする。 ・地域住民の回答内容をメモする。 ・地域住民からの返答は「なし」でも構わない。子供と地域住民の接点を持つことが目的である。
--	---

エ フィールドワーク上の注意事項

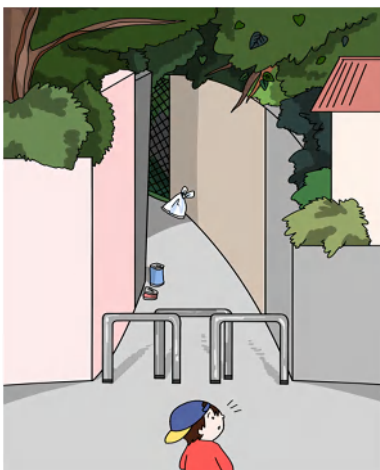
事前学習の最後に、フィールドワーク上の注意事項を子供や保護者に伝える。

(ア) 学習指導上の注意

以下の言葉は、危険な場所を誤解しやすくするため、フィールドワーク中は使わないようにする。

NGワードその1：死角

死角がある場所は見えにくくて、危険な場所だが、死角がない場所でも安全とは限らない。例えば、周囲に田畑が広がる場所は、物理的な障害物がなく死角はないが、周囲に自分のことを見てくれる人もいない。そこは「見えにくい」場所である。



NGワードその2：暗い

暗い場所が危険で、明るい場所が安全とは限らない。明るい場所は安全のように考えがちであるが、犯罪者も好きなタイプの子供が確認できるため、明るい場所を好む。昼間危険と思われる場所を照明により明るくしても危険な場所であることには変わりがない。照明は景色を昼間に戻すだけである。明るいというだけで安心しないように気を付けなければならない。

NGワードその3：人通り

人通りがある場所が安全で、人通りがない場所が危険とは限らない。人通りが多い場所では、その場にいる一人一人の関心や注意が拡散してしまうので、心理的に「見えにくい」場所となる。



(イ) 安全管理上の注意

【交通安全】

- 1 フィールドワークは校外活動となります。班員はなるべく等間隔でそろって歩くように指導する。
- 2 交通安全は副班長の担当である。後方から自動車やバイク、自転車等が来ることがわかったときは、「自動車がきます。」等の声掛けを行い、注意喚起する。
- 3 狭い歩道等で歩行者とすれ違う時も通行の妨げとならないように注意する。
- 4 危険（安全）な場所で立ち止まり、意見交換や写真撮影をするときは、車両等の通行に関する注意力が散漫になりがちである。集団で立ち止まるとスペースが大きくなり危険の度合いも高まるので、特に注意する。
- 5 各班には副班長のほか保護者が1名程度付き添い、交通安全に配慮する。子供は保護者の方の助言に従うよう指導する。

(ウ) プライバシーの配慮等

【写真撮影】

- 1 写真を撮るときは、プライバシーに配慮し、なるべく人の顔や室内、表札などを写さないようにする。
- 2 写真は多少遠目から全体を捉えるように撮影する。
(例：落書きされた塀を撮る場合は、落書きだけをアップで撮影せず、道路も含めて撮影する。)
- 3 撮影枚数は、おおむね20枚程度とする。

(エ) 時間管理等

【その他】

- 1 フィールドワークは、調査エリアのみ定めた上で実施する方法があるが、一方であらかじめ定めたルート歩き、付き添いの保護者にルート上の重要ポイントを示す地図を渡しておく、効率的にフィールドワークを行うことができる。
- 2 子供が時計を持っていない場合、付き添いの保護者の方には、学校へ戻る時間を意識した時間管理をお願いする。
- 3 地域安全マップづくりでは、すべての子供に役割を付与し、やりがいをもって取り組んでもらう。出発前には、班ごとに集まり作戦会議を開いて、調査エリアの確認、各自の役割の確認をする等、機運を盛り上げる。

(3) STEP 2 フィールドワーク

フィールドワークを一言でいえば、まちの点検である。

班長のリードにより、実際の景色を見ながら事前学習で学んだ、誰もが「入りやすい」、誰からも「見えにくい」危険な場所を探す。

このとき、誰もが「入りにくい」、誰からも「見えやすい」安全な場所も合わせて確認する。

交通安全は副班長の担当である。周囲に気を配りながら安全にフィールドワークを進める。できれば、最後方から保護者にも見ていただくと更に安心である。また揃いの腕章やビブスを付けると、地域の人にわかりやすい。



ア 各自の具体的な役割

班長

班長は、教員から渡された地図（進行ルート記入済み）に従い、班員を率いて歩く。班員がバラバラにならないよう、歩くスピードに気を付ける。

「入りやすい」「見えにくい」と思われる場所を発見したら立ち止まり、班員から意見を聞いてみる。また班員が発見した場合も同様とする。

また付き添いの補助員には、チェックポイントを記した地図を渡しておき、保護者の方から「この場所はどうかな。安全、危険？」と尋ねられたら、班員から意見を聴取して取りまとめる。そのとき、「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを使って、その理由を考えるようにする。そして危険（安全）な場所と判断できれば、プライバシーに配慮しながら写真を撮影するように写真係に指示する。

進み具合が遅い場合は保護者が助言することでスピードアップするようにする。

副班長

班長を補佐するとともに、交通安全に配慮するのが副班長の役割である。班長が気付かず通り過ぎそうになった危険（安全）な場所を発見した場合は、進んで班長に伝える。また写真係や地図係が困っているときは、進んで声をかけるなどフィールドワークが円滑に行われるように努める。



写真係

班長から写真を撮影するよう指示を受けたとき、危険（安全）と判断した場所だけでなく、周辺の風景も入るように撮影する。プライバシーに配慮するとともに、普段使い慣れていないカメラなので、始めの数枚はきちんと撮影できたか確認する。副班長にも協力を求めると、より確かなものとなる。

撮影枚数は、延べ 20 枚程度を目安とする。

* フィールドワーク後、学校に戻り次第、教員にカメラを返却する。マップ作製前に教員は速やかに班ごとに写真をプリント（1枚のA4用紙に4枚）して、各班へ渡す。班番号とカメラ番号を照合しておく、円滑に進められる。

地図係

班長同様、地図係にも進行ルートを記した地図が渡される。担当者は、学校を出発してからのルートを確認しながら、写真を撮影した場所を記すとともに、危険（安全）と判断した理由を地図の余白に記入する。

地図係によるメモは地図作製時に大きく役立つ。理由については、「入りやすい」

「見えにくい」というキーワードを必ず使って、簡潔にわかりやすく書くように指導する。困ったときは副班長に相談する。班員が6人以上の場合、地図係を2人とし、記入内容を相互に相談する。



インタビュー係

地域の方へのインタビューは、保護者でなく、担当の子供が行う。

調査ルートの設定に当たり、教員が下見をしたとき、インタビューを引き受けていただけよう依頼し、地図に記しておく、円滑にインタビューが行える。

イ まちの中のチェックポイント

道路や公園、駐車場等は、子供が屋外で犯罪に遭いやすい場所である。事前学習で「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを学んだ子供がその視点で実際のまちを眺めたとき、日頃通学や遊び等で利用していたこれらの場所も異なる景色に見えてくる。フィールドワークでは集中力を高めて、まちの景色を観察するように指導する。ただし、実際の現場には「100%安全・危険」という場所はない。以下に例示としてチェックポイントを示すが、一つの場所に「安全」な場所と「危険」な場所が同居していることは珍しくない。多少でも「危険」と感じられる場所では十分注意するように指導する。



■ガードレール

安全



ガードレールがある「入りにくい」場所

危険



ガードレールがない「入りやすい」場所

【解説】

ガードレールは、交通事故を防ぐ設備として重要な役割を担っているが、防犯面でも「入りにくい」環境を整えてくれる。子供がガードレール越しに停車中の車から声を掛けられた場合、ガードレールがあると無理やり連れ込むことは難しくなる。ただし、ガードレールには切れ目がある。そのような場所で声を掛けられた場合は、連れ込まれる可能性があるので注意が必要である。

子供へはガードレールがある場合、ガードレールを利用するように指導する。

また、下の写真のような、いわゆる道幅が狭い生活道路には、ガードレールがない。こうした場所で近づいてきた車の中から声を掛けられた場合は、注意するように指導する。

■高い塀や生け垣が続く道路

危険



周囲からの視線がない「見えにくい」場所

危険



子供の姿を隠してしまう生け垣

危険



周囲からの視線がない
トンネル構造の場所

【解説】

道路の両側に高い塀や生け垣などが長く続く場所は、周囲からの視線がなく「見えにくい」ため危険である。

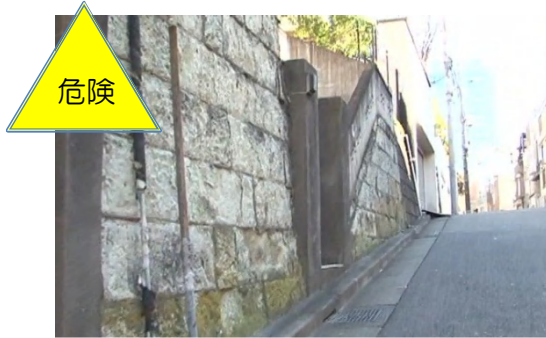
生け垣などが子供の背の高さを上回る場合、子供の姿を隠してしまう。

犯罪者が近づいてきても、気付くのが遅れる。子供の視線で景色を眺めてみると良い。

住宅地の中にも、高い塀が続く道や道路側に窓がない家が立ち並ぶ景色が見られる場所がある。1階部分が駐車場、2階以上に居住空間がある家も少なくない。

こうした道路を通るときは、自分のことを見してくれる人がいないので、十分に注意するように指導する。

■坂道が続く道路



坂道は長くなるほど高低差が大きい



【解説】

坂道を下って歩くと、始めのうちは家の中から見てもらえていた（「見えやすい」場所であった）としても、次第に高低差により、塀が高くなり見てもらえない「見えにくい」場所となる。

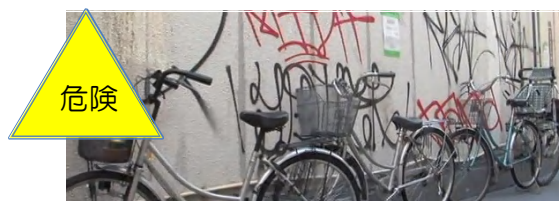
都内でも坂道がある地域は少なくない。坂道にはこうした危険があることも子供には指導する。

坂道では道路の両側が同じ状態となるため、長くなるほど高低差が大きくなり、「見えにくい」状況が顕著になる。

■落書きや放置自転車のある道路



壁いっぱいに描かれた落書き



落書きや放置自転車は、危険な景色の象徴



狭い路地に放置された自転車

【解説】

放置されたままの落書きや自転車は、地域の人々の無関心さの表れと考えられる。これらの場所は、監視性や領域性が低く、心理的に「入りやすい」、「見えにくい」場所であるため、犯罪者が好む。

こうした場所を子供が通る場合は、十分に注意するように指導する。低学年の子供には一人で通らないように指導する。

「割れ窓理論」にあるとおり、地域にこのような場所がある場合は、その地域の町会や自治会、自治体、警察等に相談し、早期に連携して改善すると良い。

■花や植物がたくさんある道路

安全



手入れの行き届いた花のある景色

安全



【解説】

花や植物がたくさんある場所では、住んでいる人がいつ水やりのために外へ出てくるかわからない。心理的に「入りにくい」場所である。

犯罪者は、顔を見られたくないのでこうした場所を嫌う。

また、家の前で花や植物を育てる人は、道行く人にきれいな花を見せたいという思いがあり、地域に関心がある人である。

このため、こうした場所は心理的に「見えやすい」でもあり、犯罪者は嫌がる。

■掲示板

安全



きちんと管理された掲示板

っていたり、剥がれていたりする掲示板は地域の関心が低い場所と考えられる。地域の人々の取組により、犯罪者を寄せ付けない場所にしたいものである。

【解説】

路上に設置された町会や自治会等の掲示板は、その管理状況により犯罪者へ縄張り意識や当事者意識の有無を伝えるサインとなる。

常に、最新の情報がきちんと掲出されている掲示板は地域への関心が高い場所であることを示す。

他方、古い掲示物が貼られたままとな

■空き家

危険



長期間放置されたであろう空き家

【解説】

近年、空き家対策が問題となっているが、空き家は犯罪者が潜む、若しくは子供を連れ込む場所に利用される恐れがある。こうした場所には地域の人々の関心も低くなりがちであるため、子供には近づかないように指導する。

■周囲から見えやすい（見えにくい）公園



周囲から「見えやすい」公園

【解説】

写真のように、周囲から「見えやすい」公園は安全である。植栽の高さが低いので、中を見通すことができる。しかも周囲の家の窓が公園側を向いている。こうした公園は、いつ、誰に見られるかわからないので、犯罪者は嫌う。



高い塀と高木のため「見えにくい」公園

写真の公園は、塀も高く、高木のため、周囲に家があっても、公園の中を見てももらえない、誰からも「見えにくい」公園である。こうした公園は、犯行が見えにくいいため、犯罪者が好む。

■入りにくい（入りやすい）公園



周囲を柵で囲まれた公園

【解説】

写真の公園は、周囲を柵で囲まれており出入り口が限定された、「入りにくい」公園である。周囲から公園の内部を見通すことができるため、「見えやすい」「入りにくい」安全な公園と考えられる。



入口に柵が設置された公園

写真の公園は、入口に柵を設け、かつ通路が曲がっているため、「入りにくい」構造となっている。

「入りにくい」は「逃げにくい」につながり、犯罪者が嫌がるため、安全な公園と考えられる。



どこからでも入ることができる公園

写真の公園は、周囲に柵も塀もない。誰もがどこからでも入ることができる「入りやすい」公園である。

逃げ道もたくさん考えられるため、犯罪者が好む危険な公園の一つである。

■管理された（管理されていない）公園



花壇が整備された公園



雑草が伸び放題の公園



タバコや空き缶が放置された公園

【解説】

写真のように、きちんと管理された花壇がある公園は、日々誰かが手入れをしている、心理的に「入りにくい」公園である。地域の人に関心が高い場所は、犯行が見つかりやすい、通報されやすいと考え、犯罪者は犯行をためらう。

写真のように、遊具の周囲を含め、雑草が伸び放題の公園は、地域の人に関心が低い、誰にも見てもらえない、心理的に「見えにくい」場所である。

犯罪が起こりやすい危険な場所と考えられる。

下の写真の公園も、ベンチの周りにごみが散らかったままの心理的に「見えにくい」場所である。

ごみを放置したままにすると、さらに増える恐れがある。地域のボランティア等による清掃が期待される。

■入口が男女別（男女共用）の公園のトイレ

【解説】

トイレの個室は、内部が見えない空間である。このため、男女別のトイレが望ましく、入口が離れていればより最適であると考えられる。

なお、トイレの場所は周囲からの視線を確保しやすい公園の入口付近が望ましく、奥まった場所にあるトイレは「見えにくい」ため危険と考えられる。子供が使用する場合は、友達と一緒にいくように指導する。



入口が男女別のトイレ

写真のトイレは、男女別で入口が離れている「入りにくい」安全なトイレである。男性が女性トイレの入口付近に立ち止まっていれば奇異に感じる。

また入口が周囲から「見えやすい」ので、より安全なトイレと考えられる。



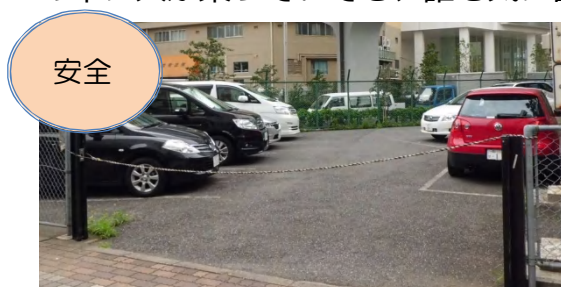
男女共用のトイレ

写真のトイレは、男女共用である。
入口も同じであるため「入りやすく」
また目隠し用の板が設置されているため
「見えにくい」危険なトイレと考えられ
る。こうしたトイレは男性も使用するの
で、子供に続いてトイレに入っても奇異
に見えない。子供の背後から近づき、個
室に連れ込む恐れもあるので使用する場
合は十分に注意するよう指導する。

■ 駐車場

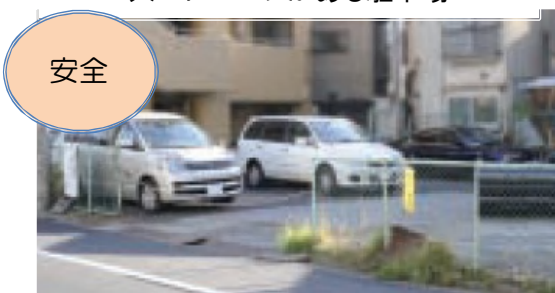
【解説】

多くの駐車場は民有地であり、車両が出入りすることから子供が立ち入るのは好ましくないが、子供はこうしたスペースにも入りがちである。しかし、コインパーキングなどは車両を利用する犯罪者の作戦基地になりやすく、停車中の車に人が乗っていても、誰も気に留めない。入口から遠く周囲からの視線がない場所や車の陰となり見えにくい場所



入口にロープがある駐車場

写真のように、入口にロープがある駐
車場やフェンスで囲まれた駐車場は「入
りにくい」場所であるため、安全である。



フェンスで囲まれた駐車場

駐車場の中には、隣接する道路から自
由に出入りできるものもある。こうした
駐車場は「入りやすい」場所であり、子
供を連れ去るのにも好都合である。写真
のように、出入口が限られている駐車場
は「入りにくい」場所であり、安全であ
る。

また管理状況が悪い駐車場には落書きがあったり、ごみが放置されている。こうした場所は管理者からの視線がなく、犯罪も見えにくいものとなる。こうした駐車場には立ち入らないよう特に指導する。

■マンションや団地の階段、踊り場



中の様子が見えない階段



中の様子が見える階段

【解説】

マンションや団地の階段、踊り場は、高層になるほどエレベータを使用するため、視線が少なくなりがちである。

写真のように、壁のため中が見えない構造の場合、「見えにくい」危険な場所と言える。

子供への犯罪が多い場所の一つである。こうした場所には近づかないように指導する。

写真のように、フェンス構造の階段や踊り場は、中の様子が「見えやすい」ため、安全な場所と言える。ただし、階段は子供が遊ぶ場所ではないので、必要のないときは近づかないように指導する。



■駐輪場



周囲から見えにくい駐輪場

【解説】

写真のように、壁で囲まれた駐輪場は周囲からの視線が得られにくい、「見えにくい」場所である。危険な場所のサインである落書きも見られる。こうした場所では遊ばないよう、十分注意するように指導する。

安全



周囲から見やすい駐輪場

写真のように、「見えやすい」駐輪場は安全である。手前の花壇はきれいで、よく管理されていることがわかる。ただし、子供の背の高さを超えるようであると、「見えにくい」場所となるので注意が必要である。

■ごみの放置

危険



【解説】

写真のように、自転車や粗大ごみ、生活上的ごみが地域の集積場以外の場所に放置されている場所は、地域の人々の関心が低い「見えにくい」場所である。子供は狭い路地などへ好んで入りがちであるが、周りが囲まれていて視線がないため、危険な場所である。

■子供 110 番の家

安全



【解説】

「子供 110 番の家」とは、子供が危険に遭遇したり、困りごとがあるときに安心して駆け込める場所で、子供の安全に意識の高い「見えやすい」場所である。

自治体によっては、名称やデザインが異なるが、写真のようなステッカーが貼ってある家やお店は安心して駆け込むことができる。コンビニなどの様々な業態も独自のステッカーを作成して子供を受け入れている。学校や家庭で「子供 110 番の家」を訪問し挨拶しておく、より身近に感じられる。

ウ 補助員の役割、注意事項

各班に配置される補助員の主な役割は、交通安全と子供自身の気づきの補助である。

- 交通安全面では、一歩下がって子供全体を見ながら車道側を歩くようにする。また後方から車やバイク等が来たら、子供に注意を促す。



- 子供自身の気づきの補助については、補助員が「犯罪が起こりやすい場所」や「安全な場所」に気づいた場合も先行して教えることなく、子供が気づくのを待つ。仮に子供が気づくことなく、通り過ぎようとした場合は、子供に声をかけ、「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを使って、「犯罪が起こりやすい場所」又は「安全な場所」を考えるよう促す。



補助員が主体となり、説明をしている
悪い例



子どもが主体となり、気づき考える
良い例

子供が通り過ぎようとしたときの対応例

- (補助員) みんな、ちょっといいかな。この場所は安全？ 危険？
どう思う？
- (子 供) う～ん。危険だと思う。
- (補助員) どうして、そう思うのかな？
キーワードを使って説明できるかな？
- (子 供) この道路は、あっちからもこっちからも入ることができるから
「入りやすい」。そして道路の両側の家の塀は高く、家の中から
私たちのことを見てもらえないので「見えにくい」。
だから「入りやすく見えにくい」危険な場所だと思う。
- (補助員) そうだね。誰もが入りやすく、誰からも見えにくい場所だね。
表札等に注意しながら、道路を中心に写真を撮ろうか。

■チェックポイント

前述のとおり、フィールドワーク上のチェックポイントは様々あるが、それに固執することなく、あらゆる景色を眺め、「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを用いて、危険や安全の判断をするよう促す。

■調べる場所

- ・道路や公園など公共の場所を調べる。個人の家屋など私的な場所はプライバシーの侵害となるので調査の対象外とする。ただし、家の中から見てもらえるかという視点で塀や生け垣等の高さ、植栽の有無等を調べ、必要に応じて、表札や家の中が映り込まないように写真を撮る。
- ・担任の教員から調査ルートが示されていない場合、例えば、学校との往復時間が30分程度の場所にある公園を目指して歩くよう班長へ促す。その途中、道路や駐車場、路地裏といった様々な場所を調べると学習効果が高まる。

■インタビュー

- ・子供へは、「インタビューの目的は情報収集」と説明するが、真の目的は「地域に子供を見守っている大人がたくさんいることに気付かせること、そして、地域の安全のために活動している子供の姿を見てもらうことで、地域住民の間で子供を見守る気持ちを高めてもらうこと。」である。
- ・例えば、子供 110 番の家は、子供の安全安心に協力的で安全な場所である。まちの中で見つけた場合は積極的にインタビューする。子供と協力者の大人が顔合わせをするだけでも効果はある。ただし、店舗の場合は営業に差し障りがない範囲で行うようにする。
- ・インタビューは補助員でなく、子供がする。補助員は次の点に注意しながら見守るようにする。

- ・開始時と終了時には、きちんと挨拶すること。
- ・相手の都合を聞いた上で、インタビューを始めること。
- ・単に「危険な場所がありますか。」という聞き方では、交通事故の場所を答える可能性が高いため、「犯罪」という言葉を交えてインタビューすること。

※やりとりの例

- ①こんにちは。▲▲小学校の子供です。今、地域安全マップを作っています。
 - ②申し訳ないですが、お話を聞かせていただいてもよろしいでしょうか。
 - ③この辺りで犯罪に遭うかもしれないと不安に思う場所がありますか。
 - ④ご協力ありがとうございました。
- (挨拶をきちんとし、お礼をしっかりと伝える。)

- ・「あの公園は、夜になると見慣れない人がたくさん集まるから危険」と言われた場合、その場所に赴き、「人」よりも「入りやすく見えにくい公園だから問題があるね。」と子供の視点を「人」から「場所」へ転換させる。
- ・調査時間に余裕がある場合は、インタビューで教えていただいた「犯罪が起こりやすい場所」へ行き、誘拐などの手口を参考にロールプレイングやシミュレーションを行ってみると子供の記憶に残り、とても効果的である。

■その他

- ・フィールドワークで見つけた「犯罪が起こりやすい場所」では、補助員が犯人役となり、「子猫がいるよ!」と言って子供を見えにくい場所に連れ込むなどして、リアリティを子供に感じさせると良い。



＊事前学習の時間では、「僕は絶対に騙されない。」と話していた子供も意外とあっさり騙されたりする。しかし、一度騙される経験をする、2回目からは警戒心が高まり、容易に騙されなくなる。この体験は、短時間で子供の危機予測能力を向上させることができる。

(4) STEP3 マップ作製

フィールドワークを終えると、地域の中の「犯罪が起こりやすい場所」や安全な場所が把握できる。

地域安全マップは、その情報を整理し、その場所の写真と判断理由を明示することにより、知識の定着を図るものである。

したがって、見栄えの良い、正確な地図を作製する必要はない。フリーハンドで、大まかなマップを描く。考案者の小宮教授は「例えば、火星の地図でもいい。」と話す。つまり架空の地域の設定でも構わないのである。地域安全マップづくりの目的は、子供自身が景色解読力を身に付けることである。景色を再現した写真と、「入りやすい」、「見えにくい」というキーワードを用いた安全・危険の判断理由がセットで明示されていれば十分である。精緻なマップを作り、「●●さんの家の前は危険」と明示してしまうと、不要なトラブルを招く恐れもある。子供の創作意欲を高めながら、目的に沿ったマップ作製を進めると良い。

写真のとおり、色紙やカラーマーカー等を使って、楽しみながら協力して作製する。メンバーごとに最低一つの場所を担当させ、写真の切り取りとコメント作成を指示する。そうすることで、メンバー全員の参加意欲が高まり、能力向上を図ることができる。



ア 作業手順

- ・教室で作業する場合は、複数の机を合わせて模造紙が広げられるスペースを確保する（机を寄せて、床で作業するスペースを確保しても構わない。）。ランチルームや視聴覚室等を利用する場合も同様である。体育館を利用すると、広いスペースを有効に利用することができる。
- ・フィールドワーク中に班ごとの作業エリアを決め、模造紙やカラーマーカー、のり、はさみ、色紙、付箋等の消耗品をセットしておく、とスムーズに進めることができる。
- ・どの写真（場所）をマップに貼るか選別の上、担当を決める。
- ・子供は分担された場所の写真に合わせたコメントを作成し、写真とともにマップに貼る。

① 模造紙をテーブル上等に広げ、フィールドワークをした街を大まかにレイアウト（道路、学校、公園、商店街など） *バランスよく、大きく描く。

②表題として、「地域安全マップ ○班」と記載します。

ただし、個人情報保護のため、作製者や住宅の所有者など個人が特定できるものは記載しない。

*色紙やカラーマーカー等を使い、楽しくオリジナルのマップを作製



③写真を選び、なぜ安全・危険と考えたのか、その理由を付箋にコメントして写真と一緒にマップに貼る。写真に表札や車両のナンバープレート等が写っている場合は黒塗りします。

(ア) 全体レイアウト、表題記入（デザイン化）

班のメンバーが5人の場合、2人で地図の概観を描き、残りの3人でデザインを含めた表題の記入をする。地図はフィールドワークのスタート地点である学校を起点に歩いた経路を大まかに描く。一人は実際に模造紙に描き、もう一人は全体のバランスを見ながら大きさ等をアドバイスする。始めは鉛筆で下書きするのがよい。後で写真やコメントを貼りつけるので、模造紙いっぱい大きく描くように指導する。時間をかけなくて良いことを説明する。

表題作成はマップ作り本来の趣旨ではないが、メンバー全員の参加意欲を引き出すため、色紙等を使用して楽しく取り組むことを指導する。



マップづくりはメンバー全員で分担し、楽しく取り組む

(イ) 写真選び

写真は景色を再現するもので、とても重要である。

現地では、地図係が安全・危険と考えた理由をメモしているので、それを参考に思い出しながら、使用する写真を選ぶ。メンバー一人当たり1～2枚を担当すると、マップには10枚程度の写真が貼られる。

発表会には現地を見ていない子供も参加する。初めて写真で確認する子供にもその特徴がわかるような写真を選びます。また、日頃、その場所を利用したことがある子供も、地域安全マップづくりの指導を受けた後は景色が異なって見えると言うので、後で作成するコメントに適合した写真を選ぶことが大切である。



(ウ) コメント作成

地域安全マップづくりにおいて、コメント作成が最も肝となる学習である。

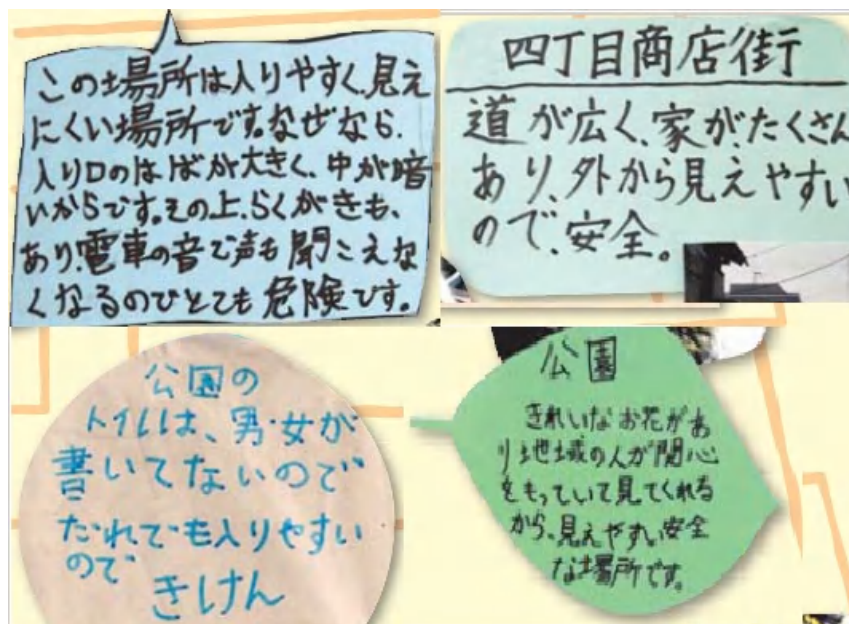
地域を歩いて見つけた「犯罪が起こりやすい」危険な場所や「犯罪が起こりにくい」安全な場所について、なぜそのように考えたのか、写真の景色に合わせて理由をコメントする。この過程で子供の「景色解読力」が定着するので、時間をかけてしっかりと作成するように指導する。

*文字がたくさん書かれたコメントは、子供がよりその場所について考えた証である。キーワードの有無など以下のポイントが押さえられているか確認する。

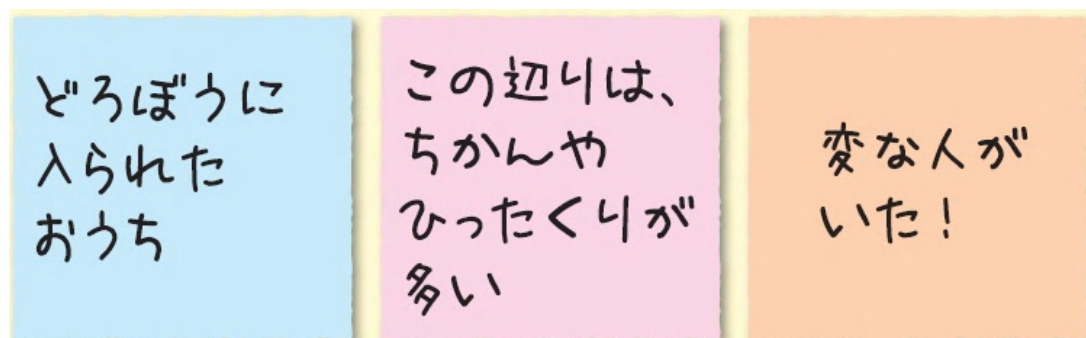
コメント作成のポイント

- ・ どのような場所であるかを記入する。
(例：ここは〇〇公園である。ここは学校の前の道路である。)
- ・ 必ず「入りやすい」「見えにくい」という2つのキーワードを用いて、その場所の特徴を記入する。
(例：この公園は周りに柵がなく、どこからでも入ることができる「入りやすい」公園である。)
(例：この公園は雑草がたくさん生えていたり、ごみが落ちていた。また公園側に窓のある建物はなかった。きちんと管理されておらず、周囲からの視線がない「見えにくい」公園である。)
- ・ だから「危険」「安全」と結論付ける。
(例：だから、この公園は危険である。)

■ 良い例



■ 悪い例



＊一つの場所で、「安全」な場所と「危険」な場所が同居している場合、子供に選択させることは困難なので、二つともコメントするように指導する。

イ 補助員の役割

- ・マップ作製は子供が中心となり作業をすることが重要である。
- ・マップ作製に当たっては、補助員が作業をすることのないように気を付ける。
- ・地図の概観作成（全体レイアウト）では、フィールドワークで使用した住宅地図上に、実際に歩いた道を赤ペンでなぞらせ、その道筋を模造紙に拡大して描かせる。



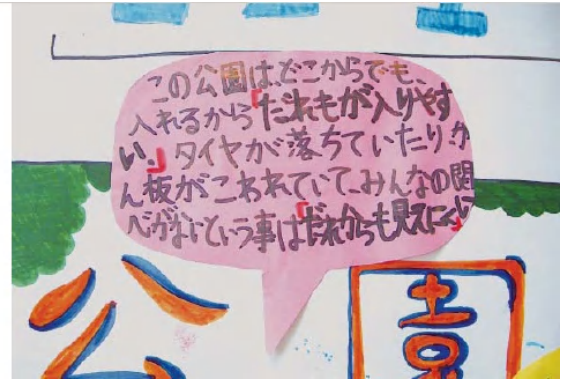
- ・フィールドワークで撮影した写真を使い、子供に「犯罪が起こりやすい場所」とその理由を復習させる。
- ・写真選びに当たっては、表札やナンバープレート、通行人の容姿など、プライバシーを侵す可能性がないか確認する。仮に映り込んでいる場合はマジックペンで黒塗りさせる。
- ・コメント作成に当たっては、「人」に関するコメントがあり、「不審者マップ」や「犯罪発生マップ」になっていないか確認する。また、「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを使うように指導する。



悪い例：塀が高いから危険 → ×

良い例：塀が高いので、家の中から見えにくい。だから危険 → ○

＊コメントは付箋などに下書きしてから、全員で確認し、その後に色紙に清書するようにすれば、すべての場所のコメントをメンバー全員で共有できる。



<注意事項>

- ・住民のプライバシーや地図会社の著作権を侵害する可能性があるため、既成の地図を拡大コピーしてマップの土台とすることはやめる。

(5) STEP 4 発表会

メンバー全員で協力して作製したマップについて、キーワードを用いて友達の前で発表する。自分の意見や感想を伝えようとする過程で、より理解が深められ、学習効果が高まる。他のメンバーの意見等を聴くこともとても勉強になる。

さらに、他班の子供にとっても、自分たちとは異なる地域の調査結果を聴くことができる。その都度、「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを耳にするので、景色解読力はさらに高められる。



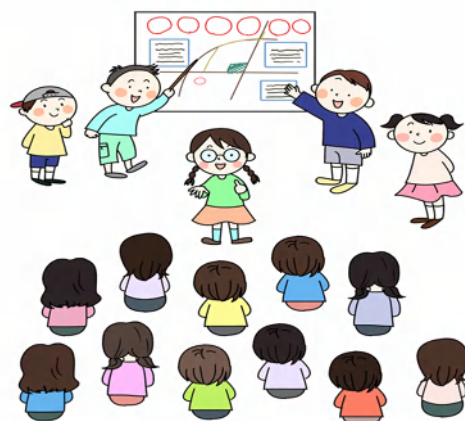
ア 発表会の手順

- ・各班が作製した地域安全マップを掲示するため、ホワイトボードと磁石を用意する。ホワイトボードは説明本番用と説明待機用の2つが用意できると発表もスムーズに行うことができる。
- ・また、2つの班以外の地域安全マップも複数のテーブル上に置き、発表会終了後に自由に見てもらえるようにする。
- ・発表は、第1班から、若しくは最終班から、いずれの班からスタートしても構わない。1班5分から10分程度で、調査結果や苦労話、反省点等について発表してもらう。
- ・始めは班長が総括的な話をし、その後各メンバーが自ら担当した場所の状況や感想等を話す。
- ・補助員がコメントする場合は、「皆さんの取組はとても良かった。」という漠然

としたものではなく、「何がどのように良かったのか」、「このようにするとさらに良くなる」等、具体的なアドバイスをする。

イ 参加者

- ・発表会には、子供の保護者のほか、近隣の地域住民、防犯ボランティア、区市町村職員、警察官を招き、地域の防犯意識の向上に役立てる。
- ・また、1学年下の下級生を招き、上級生の取組を直接見せることで、翌年の取組につなげることができる。下級生も「来年は僕たちが取り組むぞ!」と学習意識を高めることができる。



ウ まとめ



事前学習、フィールドワーク、マップ作製、発表会と地域安全マップづくりの過程を一通り終えたところで、おさらいの意味を込めて復習をする。

犯罪が起こりやすい場所を見つけるためのキーワードは何であったか。そして、そういう場所ではどのようなことに気を付けなければならないかを指導する。

「安全のための注意事項」は次のとおりである。

～「安全のための注意事項」～

- ・犯罪が起こりやすい、危ない場所へは近づかない。
- ・やむを得ず、危ない場所を通らなければならないときは、保護者や友達等複数で行くようにする。独りでは行かない。
- ・一緒に行く人はいないが、どうしても危ない場所を通らなければならないときには周囲の様子に注意して通るようにする。

☆POINT！ 低学年への指導方法

低学年の子供への指導には、次の課題がある。

- ① 地図の作り方や見方について、学習していない。
- ② 「入りやすい」「見えにくい」という概念が理解できない。
- ③ メモの取り方に慣れていない。

低学年の子供へ地域安全マップづくりを指導するときは、地域安全マップづくりを経験したことがある高学年の子供との共同学習とし、高学年の子供から低学年の子供一人一人にマンツーマンで補助をすると、スムーズに学習することができる。



高学年との共同学習

○ 役割分担

フィールドワークでの役割分担は、高学年の子供が班長や副班長、地図係を務め、低学年の子供に写真撮影やインタビューを担当させる。高学年の子供は、あらかじめ犯罪が起こりやすい場所や安全な場所を2～3か所程度決めておき、その場所で低学年の子供へ指導するようにする。



写真係は低学年の担当

○ わかりにくい言葉、写真撮影

低学年の子供には、「入りやすい」「見えにくい」等の言葉がわかりにくいこともある。そのような時は、現地でロールプレイング等の実演を交えて説明すると効果的である。

例えば、ごみや落書きがある場所は地域の大人の関心が低く、その場所で子供が危ない目に遭い困っていても見て見ぬふりをするかもしれない。こうした地域の大人に見てもらえない場所は、「見えにくい」場所であると指導する。

また、フィールドワークで写真を撮影する時はプライバシーの配慮、インタビューをする時は挨拶の仕方等、守るべきマナーを教える。高学年の子供も低学年の子供に教えることで自らの理解を深めることができる。

○ 事前学習

低学年の子供への事前学習は、担任の先生が行う。

子供には、これから何をするのか、おおよその目標を示す。校外での活動に当たっては、交通安全に十分注意するように指導し、保護者や地域ボランティア等の協力を得て各班に同行していただく。

保護者を含め地域の大人が地域安全マップづくりに関する正しい理解をしているとは限らない。協力いただける方には、事前に関係資料を配付するほか、事前学習にも参加していただき、マップづくりに関する理解を深めていただく。

事前学習では、子供が主体的にマップづくりに取り組むよう、身近な犯罪などについてクイズを出すなど、学習への集中力を高めていくことが重要である。



事前学習の風景



積極的に取り組む子供

① 体験学習

教員は、地域安全マップづくりの基本的な事項について指導するが、「入りやすい」「見えにくい」というキーワードは言葉だけでは伝わりづらいかもしれない。そのような時は、椅子やパーテーションを使い、実際に「入りやすい」「見えにくい」を子供に体験させる。身体を動かしながら考えさせると、楽しく効果的な指導ができる。

危険な場所



入りやすく
見えにくい

高いパーテーションがあるため、周囲から中の様子が見えにくい。また四方の一辺には障害物がないので入りやすい。

安全な場所



入りにくく
見えやすい

犯罪者が近づこうとしても、椅子が邪魔をして入りにくい。また高さのある障害物がないため、周囲から見やすい。

② 見えにくい場所

1 3 頁に示すとおり「見えにくい」場所には4つのパターンがある。低学年の子供には、「死角」と「地域が無関心な場所」に絞って教えることで不要な混乱を防ぐ。

特に「地域が無関心な場所」については、前述したとおり、低学年の子供にはわかりにくい表現である。このため、例えば、次の写真を見せながら、狭い路地や裏通り等なかなか人の目が行き届かない場所は、ごみが捨てられやすく、落書きもされやすい。それでも自分の家の前でない、又は自分の家の塀でないと当事者意識が働かないため、そのままにされやすい場所と説明する。



ごみ(放置自転車)



落書き

* 低学年の子供には、「入りやすい」「見えにくい」場所とは、「かくれんぼで隠れやすい場所のことだよ。」と説明すると理解が進む。

③ 高学年の子供が作製したマップを見せる

高学年の子供は、以前自分たちが作製した地図を低学年の子供へ見せて、危ない場所や安全な場所、その理由等を紹介することで、完成物のイメージを伝える。

フィールドワークでのインタビュー情報が記載されていれば、当時の話も詳しく説明する。



○ フィールドワーク

フィールドワークは少人数の班行動であるが、低学年の子供が行う場合は高学年の子供が手をつないで車道側を歩くなど、交通事故に遭わないように気を付ける。

その際、PTA や地域ボランティア等にも見守っていただくとより安全である。



手をつないでフィールドワークへ出発

「見えにくい」場所の一つ、高い塀がある場所では、実際に塀の前に立ち、家の中の人にてもらえないことを実感させる。

また周囲を見渡し、こうした高い塀が続く場所であれば、自分のことを見てくれる人がいない、「見えにくい」場所であることを理解させる。



「見えにくい場所」を体験



写真の撮り方も指導します

高学年の子供が低学年の子供へ写真撮影の指導をする。通行人などの顔や表札、家の中等が映り込まないように注意する。

カメラの操作に不慣れな子供もいるので、1～2枚程度撮影したら、確実に記録されているか確認する。また、例えば、高い塀を撮影する場合、塀だけをアップで撮影するのではなく、道路も含めて全体の景色を撮るようにする。

低学年の子供には、地図を正しく見るのが難しいかもしれない。地図係の子供へは高学年の子供が寄り添い、地図の見方や記入方法等を指導する。

地図係は、歩いた経路だけでなく、写真を撮影した場所や危険（安全）と判断した理由も記録する。路上でキーワードを使いながら記録するのは至難の業。高学年の子供がアドバイスをします。



上級生がしっかりアドバイス



「この道は安全かな。危険かな」

フィールドワークの途中、班長を務める高学年の子供の呼びかけでメンバーは立ち止まり、その場所の景色が「安全」か「危険」について考える。このときの判断基準として、事前学習で学んだ「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを使う。

以前、地域安全マップづくりに取り組んだことがある高学年の子供はすぐに答えを説明せず、低学年の子供にしっかりと考える時間を与える。



危険な場所でも、つい誘い込まれる子供

言葉で説明することが難しい場合には、「入りやすい」「見えにくい」場所へ言葉巧みに騙して誘い込むロールプレイを行うと伝わりやすい。

建物の裏や路地に誘導し、「かわいい子猫がいるよ。」「きれいな花が咲いているよ。」など子供の関心を惹きやすい言葉を用いて、誘い込む。

地域の民家や店舗（子供 110 番の家等）や商店街の方等へのインタビューをする。

インタビューを通じて、低学年の子供にも地域の人たちに見守られていることを教える。

インタビューをするときは、「今、よろしいですか。」と、はじめに先方の都合を伺うように指導する。また、インタビューの終了時には「ご協力ありがとうございました。」とお礼を述べることも忘れないように説明する。



地元の方へインタビュー

○ マップ作製

- ・はじめに高学年の子供が大まかな道路や建物等をフリーハンドで描く。
- ・低学年の子供は、写真の切り抜きやコメント作成等を行う。
- ・コメントには「入りやすい」「見えにくい」を必ず入れるように、高学年の子供が教える。あらかじめキーワードを書いたシール等を用意しておくことでスムーズにコメントづくりが行える。
- ・高学年の子供は、低学年の子供の作業を確認しながら、写真やコメントを地図に貼り付ける。



地図作製は共同作業
マンツーマンで仲良く



高学年の子供が写真やコメントを貼り付けます



コメントの書き方を教える高学年の子供

○ 発表会

- ・発表は、班ごとに高学年の子供と低学年の子供がそれぞれ行う。
- ・高学年の子供が話す内容については、事前に自分の班の低学年の子供に確認するなど低学年の子供でも理解できるよう、なるべく易しい言葉を用いるようにする。
- ・低学年の子供も、感想だけでも良いので発表するようにすると達成感が高まる。



発表は上級生も下級生も全員で一人ずつ

○ まとめ

- ・地域安全マップづくりを通じて、低学年の子供にも「犯罪が起こりやすい」場所の学習ができる。しかし、そのような場所が分かっただけでは、地域安全マップづくりの効果が半減する。40 頁に示すとおり、高学年の子供へは、「安全のための注意事項」を指導し、どのように対応すべきかを教えるが、低学年の子供へは「犯罪が起こりそうな場所へは行かない」ことのみを指導する。
- ・授業の終了時には、高学年の子供や協力していただいた保護者、地域ボランティアの方へお礼を述べるよう指導する。
- ・また帰宅後は家族に授業の様子を話し、振り返りを行うよう指導する。

6 学校での授業指導案例

※授業時数 1 時間 = 45 分

・小学校「地域安全マップをつくろう！」（全 8 時間）

マニュアル本誌では、標準版として全 4 時間の授業指導案を紹介したが、更に時間をかけ全 8 時間で指導することで、子供の理解度を高める方法もある。

【目標】 子供が通学路等を点検して「犯罪が起こりやすい場所」（だれもが「入りやすく」、だれから「見えにくい（見られにくい）場所」）を地図に表す作業を通じ、不審者等の「人」ではなく、犯罪が起こりやすい「場所」に着目させる。そして子供の危険予測能力を高め、安全に行動できるようにするとともに、安全安心なまちづくりを目指す。

【学習問題】

犯罪に遭わないためにはどうしたらいいかを考えよう。

【授業計画】

授業時数	学習内容と活動
1	■事前学習〈地域安全マップってなんだろう〉 ○ 危険な場所はどこな場所かを確かむ。 ・危険な「人」は見ただけでは分からないことを知る。 ・動画教材DVD「景色で学ぼう！ 新・地域安全マップづくりDVD」を見る。 ・危険な「場所（景色）」であれば見ただけで分かることを知る。 見た目では「良い人」「悪い人」の判断はできないので、どうしたら犯罪に遭わないようにすることができるかを考えよう。
1	■事前学習〈地域安全マップをつくる計画を立てよう〉 ○ フィールドワークのために必要なことを確認し、準備をする。 ・グループ編成をし、役割を分担する。 ・コースを決める。 フィールドワークを行うための決まりを考え、計画を立てよう。どんな準備をしなければいけないかを考えよう。

3	■フィールドワーク〈地域に出て調査をしよう〉 ○ フィールドワークをする。 ・「入りやすいか」「見えにくい」を基準に調査をする。 ・話し合いながら調査をする。 ・気づいたことをメモし、 写真を撮影する。 ・地域の人にインタビューをする。 自分たちの地域に、危険な場所はないかを実際に調査しよう。
2	■マップ作製〈調査結果をもとに地域安全マップをつくろう〉 ○ 地域安全マップを作製する。 ・地域安全マップのつくり方を知る。 ・「入りやすい」「見えにくい」という言葉を使って地域安全マップにまとめる。 ・抽象的な言葉ではなく、具体的な言葉を使ってまとめる。 フィールドワークで調べたことを友達や地域の人に伝えよう。
1	■発表〈地域安全マップをもとに地域の様子を発表しよう〉 ○ 作製した地域安全マップを発表し合う。 ○ 学習を振り返り、「安全のための注意事項」について知る。 つくった地域安全マップを用いて、友達や地域の人に伝えよう。また、学んだことをどのように生活に活かしたらいいかを考えよう。

※授業時数は例示であるため、学級の実態や学校の周辺環境に合わせて、工夫して授業するとよい。



(第1時／8時間 事前学習)

※特に重要な点を太字で示す。

(1) 本時の目標

- 危険な場所、安全な場所を見分けるためのキーワード「入りやすい場所」「見えにくい場所」について学び、危険な場所、安全な場所を見分けることができる。また、地域安全マップづくりの目的を理解することができる。

(2) 本時の展開

	主な学習内容と活動	◎支援・留意点 ■評価規準(評価方法)
導入	1 危険な「人」は見ただけでは分からないことを知る。 ○ 犯罪には、どのようなものがあるかを考える。 ○ 一般的な服装の人、マスクやサングラスを着けた人などを見て、どのように感じるかを話し合う。 2 本時のめあてを確認する。 見た目では「良い人」「悪い人」の判断はできないね。どうしたら犯罪に遭わないようにすることができるかな。	◎ 犯罪に遭わないようにするための学習であることを知らせる。 ◎ 自分の身に迫る危険(犯罪)は、子供にとっては実感の少ない学習素材である。実感の少ない学習素材を日常の生活場面に引き込み、考えさせることによって、学びが自主的・主体的になる。 ◎ 子供の実際の被害体験を深く掘り下げないようにする。 ◎ 殺人、誘拐といった犯罪について触れるとともに、声掛けやつきまといも犯罪の前兆事案であることを伝える。 ◎ 見た目では人を判断できないことを知らせる。

展 開	3 「危険な場所」とはどんな場所かをつかむ。 ①東京都の動画教材DVD「景色で学ぼう！ 新・地域安全マップづくりDVD」（16分）を見て、危険な場所とはどんな場所かを知る。 ・入りやすく見えにくい…危険 ・入りにくく見えやすい…安全 ②クイズ形式で、危険な場所と安全な場所とを考える。	◎DVDを視聴し、見た目では人を判断できないことを告げ、人ではなく、場所に着目することが大切であることを知らせる。 ◎危険な場所を理解することで、犯罪に遭いにくくなることを伝える。 ◎危険な場所と安全な場所とを比較したイラストが描かれたプリントを配付（または黒板に図示）し、クイズ形式で「どちらが危険な場所か」を考えさせる。 ◎なぜ危険（安全）なのかといった理由を考えさせる。 ◎入りやすく見えにくい「危険な場所」のイメージが定着するよう十分に時間を取る。 【物理的に入りやすく、見えにくい場所】 ・ガードレールがなく、周囲が高い塀に囲まれている道路 ・フェンスやチェーンがなく、周りが壁に囲まれた駐車場 ・フェンスがなく、建物の窓に面していない公園 【心理的に見えにくい場所】 ・落書きやゴミが放置されている場所、不特定多数の人が集まる場所
ま と め	4 本時のまとめをする。 ○学習したことを振り返る。 【子供の反応例】 ・「人ではなく、場所に着目することが大切です。」 ・「『入りやすく見えにくい』場所が危険です。」	■【知識・理解】「入りやすく見えにくい」のキーワードの意味を理解している。（行動観察・振り返りカードなど）

(第2時／8時間 事前学習)

(1) 本時の目標

- フィールドワークを実施するための、決まりや計画を立案することができる。

(2) 本時の展開

	主な学習内容と活動	◎支援・留意点 ■評価規準(評価方法)
導入	1 前時の学習を復習する。 ○ 「危険な場所」とはどんな場所かを思い出す。 ・ 入りやすく見えにくい…危険 ・ 入りにくく見えやすい…安全 ○ 日常の生活場面に引き込み、考えさせる。 ・ 学校の周りに「危険な場所」はあるのか。 ・ 学校周辺にある「危険な場所」について、思い出して発表する。 ・ フィールドワーク（現地調査）をしないと分からないことを知る。 ○ フィールドワークをするために必要なことを考える。 2 本時のめあてを確認する。 フィールドワークを行うための決まりを考え、計画を立てよう。どんな準備をしなければいけないかな。	◎ 黒板に、危険な場所と安全な場所とを比較したイラストを掲示する。 ◎ 人に注目するのではなく、場所に注目することを再確認する。 ◎ 学校周辺にある「危険な場所」について、思い出させて自由に発言させる。 ◎ 頭の中で思い出すだけでは「危険かどうか」の判断がつかないことを告げ、フィールドワークへの動機付けを行う。 ◎ フィールドワークを行うことを告げる。 ◎ 本時では、フィールドワークを行う準備をすることを告げる。 ◎ 外に出たの調査のため、決まりを作ることが大切であることを告げる。
展開	3 フィールドワークの決まりを確認する。 ○ フィールドワークの決まり ・ 交通ルールを守る。 ・ 1列になって歩き、走らない。 ・ ひとりで行動しない。 ・ 決められた時間までに戻る。 4 グループ編成等を決める。 ① グループ編成をする。 ② グループ内の役割を分担する。 ・ 班長…班員の行動をまとめる。 ・ 副班長…班長を補佐し交通安全に配慮 ・ 地図係…調査結果を地図に記載 ・ 写真係…危険（安全）な場所を撮影 ・ インタビュー係…地域住民に質問 ③ 各グループの調査エリアを割り振る。 ④ インタビューや写真撮影、地図へのメモの取り方などの練習をする。	◎ フィールドワークのために必要なことを確認する。 ・ 交通ルールを守るなどの決まり ・ グループ編成、役割分担、調査エリアの割り振り ◎ 係やその仕事の内容を知らせる。 ◎ 各係を説明し、子供の希望を聞きながら、役割分担をする。全員に係を分担する。 ◎ 調査エリアは、公園、駐車場、路地裏といった異なる場所を回れるように設定すると学習効果が高まる。 ◎ 調査エリアの白地図を用意し、提示する。 ◎ インタビューの仕方を指導する。 ・ 犯罪に遭うかもしれないという不安を覚える場所と理由を尋ねさせる。 ・ 実際の被害体験に関するインタビューは行わない。 ◎ 写真の撮り方を指導する。 ・ 家の中や表札、人の顔、車両ナンバーな

		どプライバシーを侵害するおそれがあるものは写さない。 ・どこを撮影したか分かるように地図係に逐一報告する。 ・関係のない写真は撮らない。 ◎ メモの取り方を指導する。 ・「入りやすい」「見えにくい」といったキーワード使って具体的に書かせる。
まとめ	5 本時のまとめをする。 ○ 学習したことを振り返る。 【子供の反応例】 ・『入りやすく、見えにくい』場所を学校付近で調べてみたいです。」	◎ グループごとに振り返りをする。 ■【関心・意欲・態度】安全マップづくりに協力して取り組もうとしている。(行動観察・振り返りカードなど) ■【思考・判断】見通しをもって、課題解決や探究のための方法を考えている。(行動観察・振り返りカードなど)

(第3・4・5時／8時間 フィールドワーク)

(1) 本時の目標

- 「入りやすい」「見えにくい」のキーワードをもとに、危険な場所を考えながらフィールドワークをすることができる。

(2) 本時の展開

	主な学習内容と活動	◎支援・留意点 ■評価規準(評価方法)
導入	1 前時の学習を復習する。 ○ 「危険な場所」とはどんな場所かを思い出す。 ・入りやすく見えにくい…危険 ・入りにくく見えやすい…安全 ○ グループごとに、調査内容・役割を再確認する。 2 本時のめあてを確認する。 自分たちの地域に、危険な場所がないかを実際に調査しよう。 3 フィールドワークの決まりを再確認し、必要な物品を配付する。	◎ 「危険な場所」のキーワードを確認させるとともに、フィールドワークのめあてを明確にする。 ◎ 役割を明確にすることで、一人一人の考えが活かされ、より協同的な学びが生まれる。 ◎ フィールドワークに必要な物品は事前に準備する。 ・デジタルカメラ…写真係 ・地図…班長、地図係、補助員 ・メモ用紙…インタビュー係 ・バインダー、筆記用具…地図係、インタビュー係 ・腕章又はビブス…全員 ◎ フィールドワークの決まりは、短時間で確認できるようにする。

展 開	4 フィールドワークをする。 ① グループごとにフィールドワークをする。 ② 「入りやすい (にくい)」「見えにくい (やすい)」のキーワードをもとに、立ち止まって話し合う。 ③ 写真を撮影する。 ・「入りやすい (にくい)」「見えにくい (やすい)」場所を撮影する。 ④ 危険 (安全) な場所であると気付いたり、考えたりしたことを地図やメモに書き込む。 ・「入りやすい (にくい)」「見えにくい (やすい)」というキーワードを使って、理由を書くようにする。 ・危険な場所だけでなく、安全な場所 (「子供 110 番の家」など) があったら地図に記入する。 ⑤ 地域の人にインタビューをする。 ・地域の防犯についての授業 (地域安全マップづくり) であることを伝えてからインタビューをする。 ・インタビューの内容 「犯罪に遭うかもしれないと不安になる場所がありますか？」 ・インタビューで教えてもらった場所に行き、確認をする。	◎ 暑い日は帽子を着用させ、水筒を持参させる。 ◎ 1 グループに 1 人以上の補助員 (教師または地域のボランティアの方、PTAの方など) が同行することが望ましい。 ・補助員は道路側を歩くようにし、子供全体の行動に気を配る。 ・子供が自発的に気付き、体験することを目的としているため、補助員は子供の気付きや思考の手助けをする。 ・危険な場所やポイントとなる場所に子供が気付かない場合は、補助員から助言し、子供で話し合うようにさせる。 補助員 「この場所は危険かな？」 子 供 「危険！」 補助員 「どうしてかな。キーワードを使って説明できる？」 補助員 「よく気付いたね！」 ◎ 話し合いをしながら、フィールドワークができるように支援する。 ◎ 写真係が写真を撮影する。 ・プライバシーの侵害につながるような写真は撮影しない。 - 家の中、人の顔、表札、車両ナンバーなど ・撮影した場所を地図係に知らせ、地図係は記入する。 ・補助員は、子供がむやみに撮影しないように注意を促す。 ・撮影前には、みんなで話し合いをさせる。 ・入りやすい (にくい)、見えにくい (やすい) ことが分かりやすいように撮影する。 ◎ 地図係は、気付いたことを地図やメモに書き込む。 ◎ 補助員は、子供が危険な場所だけでなく、安全な場所にも気付くことができるように言葉かけをする。 ◎ 「子供 110 番の家」は、小学校社会科 4 年「地域の安全」で学習する。 ◎ 地域の人と出会ったら、役割分担に従って、インタビューをする。 ・インタビューは、子供にさせる。 ・礼儀正しく行えるようにする。 ・インタビューで地域住民から教えてもらった場所には、できるかぎり行って確認させるようにするが、特に危険と判断される
--------	---	---

		場合はインタビューだけにとどめる。 ◎ 決められた時間に間に合うように、教室に戻る。 ■【関心・意欲・態度】友達と協力して活動することができる。(行動観察)
ま と め	5 本時のまとめをする。 ○ 学習したことを振り返る。 【子供の反応例】 ・「学校のまわりにも、たくさん危険な場所があることが分かったので、注意します。」	◎ グループごとに振り返りをする。 ◎ 各グループの調査内容に目を配り、次時の調査(または地域安全マップづくり)につながるような助言をする。 ◎ 補助員にお礼を言う。 ■【知識・理解】「入りやすく見えにくい」のキーワードの意味を理解している。(行動観察・振り返りカードなど)

(第6・7時／8時間 マップ作製)

(1) 本時の目標

- フィールドワーク時のメモや写真、インタビューをもとに、危険な場所や安全な場所を分かりやすく地域安全マップにまとめることができる。

(2) 本時の展開

	主な学習内容と活動	◎支援・留意点 ■評価規準(評価方法)
導 入	1 本時のめあてを確認する。 ○ 実際に調査をしてみての感想を発言する。 ・「危険な場所があることが分かった。」 ・「危険な場所があることを友達や地域の人に伝えたい。」 フィールドワークで調べたことを友達や地域の人に伝えよう。	◎ 地域安全マップを作製することによって、子供同士の交流や思考の流れを「見える化」することができ、フィールドワークで集積した情報を整理することで、そこから新たな課題や疑問が見出される。次なる学びへの意欲が生まれることになり、自主的・主体的な学びへとつながる。
展 開	2 地域安全マップについて知る。 ○ 地域安全マップについて知る。 3 地域安全マップのつくり方を知る。 ① 地図(街並みなど)を描く。 ・調査をした道順、学校、道路、公園など、フィールドワークした地区の簡便な地図を描く。 ・マップのタイトルとグループ名、調査年月日を書く。 ② 写真を貼る。 ・危険(安全)な場所の写真を話し合っ て決める。	◎ 地域安全マップの作製例を提示する。 ◎ マップ作製に必要なものを配付する。 ◎ 各班のマップ作製に必要な物品を準備し、撮影した写真は、事前に印刷(プリント)しておく。 ・模造紙、はさみ、付箋、色紙、セロハンテープ、多色ペン、新聞紙 ◎ 地図の作製例などを提示し、地域安全マップのつくり方を理解させる(キーワードの再確認)。 ◎ 地図は細かいところまで描く必要がなく、建物などの位置関係は厳密でなくてもよいことを理解させる。マップのタイトルとグループ名は、役割分担をし、地図を描

	・使う写真が決まったら、車両ナンバーや表札などをペンで黒く塗る。 ③ コメントを書き込む。 ・色紙や付箋を使って、危険（安全）な理由についてのコメントを書き、地図に貼る。 ・インタビューしたことを書き込む。 ・特に重要な部分には、下線を引いたり、枠囲みをしたりして目立たせる。 4 発表の練習をする。 ・役割を決める。 ・練習をする。	く作業と並行して進めると効率的である。 ◎ 地図には、住宅地図の個人名などは書かないよう注意をする。 ◎ どの写真を使うかは、グループ内で話し合って決めさせる。 ◎危険（安全）な場所の写真に分かりやすくコメントを貼付することが重要であることを知らせる。コメントは、その場所の特徴を具体的に書かせ、「入りやすい（入りにくい）」「見えにくい（見えやすい）」という2つのキーワードを使わせる。また、全員が必ず1枚以上書くようにする。 ■【技能・表現】地域安全マップの作製において、危険な場所や安全な場所が見やすく、分かりやすく表現することができる。（行動観察・マップ） ■【思考・判断】危険な場所や安全な場所について適切に判断し、対処方法を考えている。（行動観察・マップ）
ま と め	5 本時のまとめをする。 ○ 学習したことを振り返る。 【子供の反応例】 ・「マップにまとめることで、班内の他の人の考え方や意見がよく分かりました。」 ・「つくったマップを掲示することで、他の班の人や保護者の人にも危険な場所を伝えたいです。」 ・「これから、『入りやすく見えにくい』場所を見たら注意しようと思います。」	◎ グループごとに振り返りをする。



(第8時／8時間 発表)

(1) 本時の目標

- 地域安全マップを用いて、犯罪が起りやすい場所と起りにくい場所を伝えることができる。
- 犯罪が起りやすい場所で気をつけなければならないことを理解できる。

(2) 本時の展開

	主な学習内容と活動	◎支援・留意点 ■評価規準(評価方法)
導入	1 本時のめあてを設定する。 ○ 友達や地域の人々が犯罪に遭わないように、フィールドワークで調べたことを伝えよう。 つくった地域安全マップを用いて、友達や地域の人に伝えよう。また、学んだことをどのように生活に活かしたらいいかを考えよう。	◎ 他のグループの発表を聞く中で、互いのよさを認め合うとともに、自分の見方や考え方を高めていく。
展開	2 地域安全マップを発表し合う。 ① 地域安全マップを黒板や掲示板上に掲示する。 ② グループごとに発表する。 ・ 調査結果 ・ インタビューの内容 3 地域安全マップづくりで学んだことをおさらいする。 ・ 犯罪が起りやすい場所を見つけるためのキーワードは何であったか。 4 犯罪が起りやすい場所では、どのようなことに気をつけなければならないのか。「安全のための注意事項」を指導する。 ・ 犯罪が起りやすい、危ない場所へは近づかない。 ・ やむを得ず、危ない場所を通らなければならないときは、保護者や友達等複数で行くようにする。独りでは行かない。 ・ 一緒に行く人はいないが、どうしても危ない場所を通らなければならないときには周囲の様子に注意して通るようにする。	◎ 発表時は、場所が具体的にイメージできるようにし、その都度「入りやすい（入りにくい）」「見えにくい（見えやすい）」というキーワードを使わせ、危険な場所かどうか話させる。 ◎ 他のグループの発表を聞くときには、自分が調べた場所との共通点はないか、普段の自分の生活の中で同じような場所はないかなど、聞くときの視点をもたせる。 ◎ 地域には私たちを見守ってくれる人がたくさんいることに気付くことができるように助言する。 ■【関心・意欲・態度】学んだことを日常生活に活かそうと考え、さらには、自分の安全は自分で守ろうとする。（行動観察）
まとめ	5 本時のまとめをする。 ○ 学習したことを振り返る。 【子供の反応例】 ・ 「自分では危険だと思わなかった場所でも、他のグループの意見を聞いて、危険な場所であると気付きました。」 ・ 「街中では、『安全のための注意事項』を意識して、行動するようにします。」 ・ 「勉強したことを、家族や地域の人にも教えてあげたいと思います。」	◎ 個人ごとに振り返りをする。 ■【知識・理解】犯罪が起りやすい場所やそこで気をつけなければならないこと（「安全のための注意事項」）を理解している。（行動観察・振り返りカードなど）

☆POINT！ 地域安全マップづくりの理論的根拠

犯罪原因論

(伝統的な犯罪対策)

犯罪が発生してから、犯罪の原因を追及し、解明して、その原因を取り除くことによって犯罪を防ぐという考え方

原因

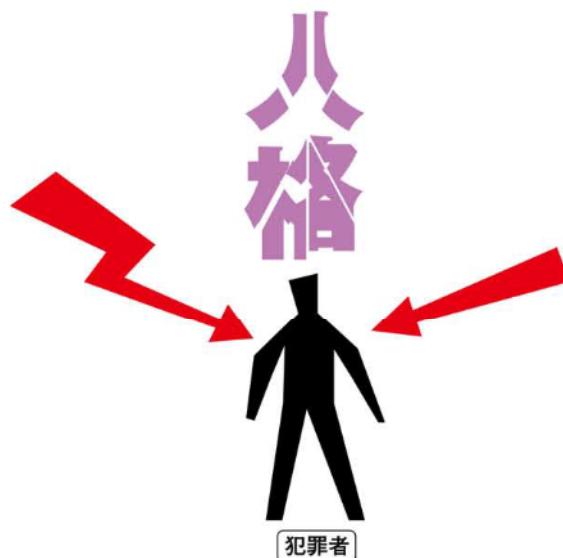
■原因究明・原因除去の困難性

欧米では、1970年代までは、犯罪者の異常な人格に犯罪の原因を求め、それを取り除くことによって犯罪を防止しようとする考え方が主流であった。しかし、このような犯罪原因論は犯罪を減少させることができなかった。

そのため、犯罪の原因を究明することは困難であり、仮に原因を解明できても、それを除去するプログラムを開発することは一層困難であることが認識されるようになった。

また、犯罪原因論は、犯罪者に焦点を合わせて、その異常な人格を改善しようとするものなので、それに基づく対策には被害者の視点が欠落していた。

犯罪者



犯罪機会論

(新しい犯罪対策)

どんなに原因がある人でも、犯罪の機会さえなければ犯罪は実行できないという考え方

■道徳教育に加えて安全教育も

「犯罪の機会」とは、犯罪の実行に都合のよい状況のことで、都合のよい状況があればあるほど、簡単に犯罪に走るようになる。ところが、犯罪の実行に都合の悪い状況があればあるほど、犯罪の実行を躊躇するようになる。

犯罪の機会に注目した場合、「人の物を盗ってはいけない(犯罪者になってはいけない)」と教育することだけでなく、「物を盗られないようにしなくてはならない(被害者になってはいけない)」という教育も必要となる。

「道徳教育(犯罪の原因を取り除くための教育)」に加えて「安全教育(犯罪の機会を減らすための教育)」も実施することが必要である。

機会

被害者



■ 犯罪機会論に立脚した対策

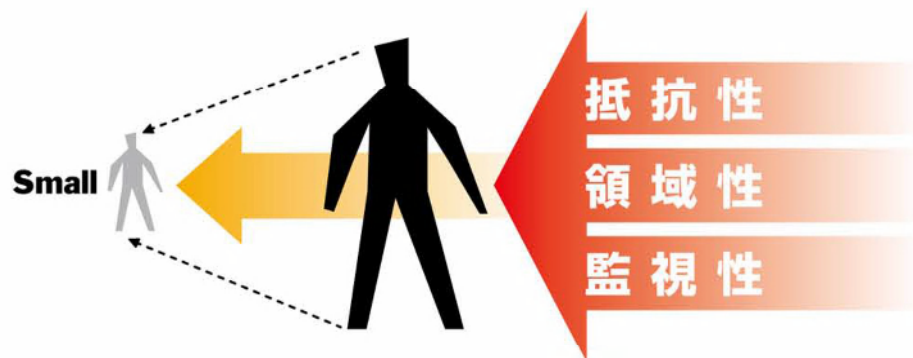
〈表〉 犯罪抑止の3要素

	犯罪抑止要素	ハードな要素	ソフトな要素
標 的 (個人)	抵抗性 犯罪者から加わる力を押し返そうとすること	恒常性 一定不変なこと	管理意識 望ましい状態を維持しようと思うこと
場 所 (地域)	領域性 犯罪者の力が及ばない範囲を明確にすること	区画性 区切られていること	縄張り意識 侵入は許さないとすること
	監視性 犯罪者の行動を見張り犯行対象を見守ること	視認性 周囲からの視線が犯罪者に届くこと	当事者意識 自分自身の問題としてとらえること

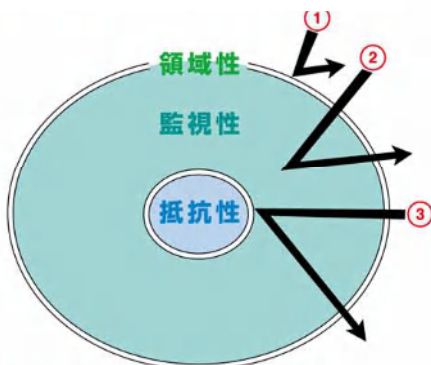
犯罪機会の減少

犯罪抑止の3要素

犯罪機会を減らすためには、次の犯罪に強い3要素「抵抗性」・「領域性」・「監視性」を高めることが必要。



〈犯罪抑止の3要素による犯罪抑止〉



- ① まず「領域性」によって、犯罪者は標的に接近できない。
- ② 仮に対象区域に入ったとしても、「監視性」によって犯罪者は犯行を思いとどまる。
- ③ あえて犯行におよんだ場合でも、「抵抗性」によって犯罪者は目的を達することができない。

「抵抗性」と「領域性」と「監視性」が高ければ高いほど、犯罪機会が少なくなる。ここで重要なことは「ハードな要素」と「ソフトな要素」があいまって作り出せるということである。

例えば、どんなに「縄張り意識」が強くても、境界が示されていないければ犯罪者に侵入され、逆に死角がなくても、見ようとしなければ犯罪者を発見できない。

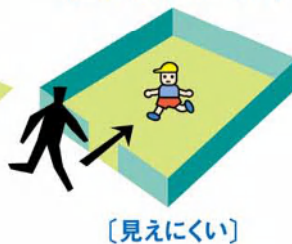
このように犯罪機会論は、人格を変えようとするのではなく、状況を変えようとするものである。抵抗性を高める工夫は、物や人に対して施されるものである。例えば、自転車に鍵を付けたりすれば恒常性は高くなる。しかし、鍵をかけ忘れれば盗まれやすくなってしまうので管理意識を高めることも必要となる。ハード面である恒常性とソフト面である管理意識の両方がそろって抵抗性は高まる。

つぎに、領域性と監視性を高める工夫は、場所に対して施されるものである。犯罪者は、物理的・心理的バリア（障壁）によって領域性の高められた場所では、接近を躊躇・断念する可能性が高い。つまり、高い領域性は、犯罪者を締め出すことができるのである。また、犯罪者は、視線を遮る物がなく、監視の目が光っている場所では、犯行を躊躇・断念する可能性が高い。つまり高い監視性は、犯罪にブレーキをかけることができるのである。

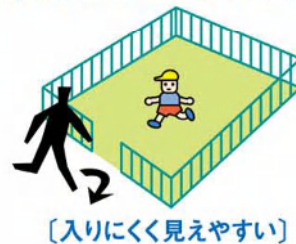
〈領域性が低い場所〉



〈監視性が低い場所〉



〈領域性・監視性が高い場所〉



ハード面の対策

(防犯環境設計)

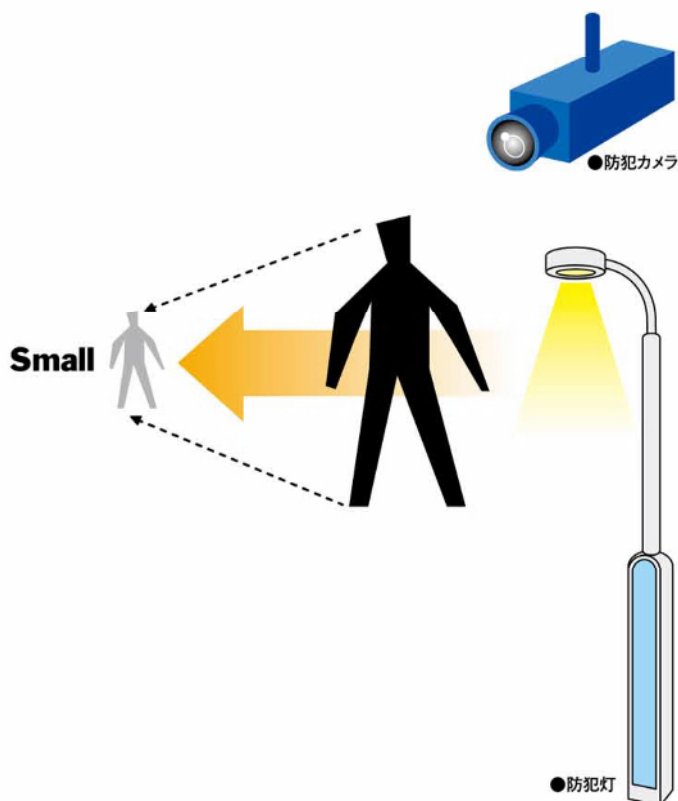
「区画性」と「視認性」が高ければ高いほど犯罪の機会は少なく、低ければ低いほど犯罪の機会が多くなる。

「区画性」と「視認性」を最大限に高めた状態は、自分の家から外に一步も出ず、家は、ハイテクのセキュリティ機器で完全武装することになってしまう。

しかし、善良な市民が家にこもり、犯罪者が街を歩きまわるのは快適とは言えない。では、安全な生活と快適な生活を両立させるにはどうすればよいか。

そのためには、自分の安全だけでなく、コミュニティ全体の「区画性」と「視認性」を高める必要がある。

【例】防犯灯、防犯カメラ



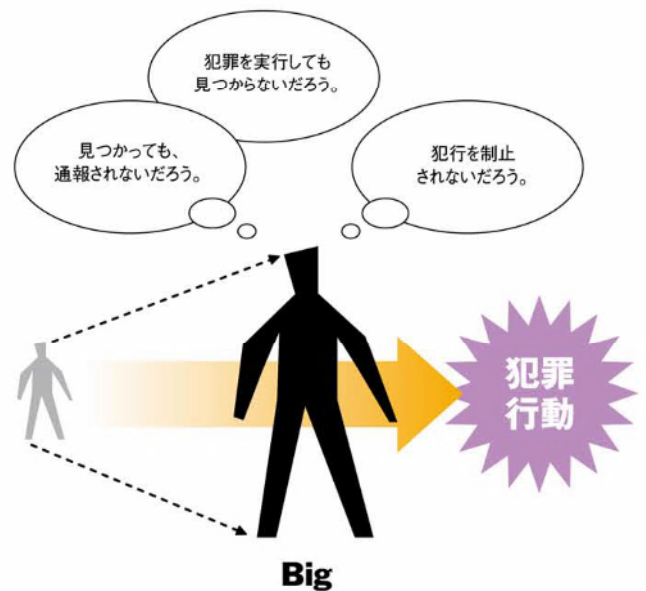
ソフト面の対策

(割れ窓理論)

■ 割れ窓理論における「割れた窓ガラス」

割れ窓理論におけるブローケン・ウィンドウズ(割れた窓ガラス)は、「縄張り意識」と「当事者意識」が低い場所の象徴である。

割れた窓ガラスが放置されているような場所では、縄張り意識を感じられないので、犯罪者といえども警戒心を抱くことなく気軽に立ち入ることができ、更に当事者意識も感じられないので、犯罪者は、「犯罪を実行しても見つからないだろう。」「見つかって、警察に通報されないだろう。」等と思い、安心して犯罪に着手する。



■ 割れ窓理論が目指すもの

- 縄張り意識を高めることによって、心理的なバリアを築く。
- 当事者意識を高めることによって、心理的な視界を良好にする。
- コミュニティにおける秩序違反行為[※]への適切な対応をなす(秩序違反行為が犯罪の呼び水となる)。
- 犯罪の多発という大きな変化は、秩序違反行為の放置という小さな変化から始まる。

したがって、犯罪の減少という大きな変化を引き起こすためには、秩序違反行為の減少という小さな変化を起こすことから始める必要がある。

※「秩序違反行為」とは、不快や不安を与え、「生活の質」を低下させる振る舞いをいい、例えば、落書きすること、公園で酒を飲むこと、ゴミを投げ捨てること、自転車を放置すること、空き家にたむろすること、公共のものを壊すこと、車内で騒ぎ立てること、街頭で乱暴な身振りをすること、雑草を伸び放題にすること等



ゴミの不法投棄



放置自転車



落書き



まわりから見えにくく、関心もなさそうな公園



雑草が伸び放題の廃家

7 地域安全マップづくりの効果

(1) 犯罪未然防止

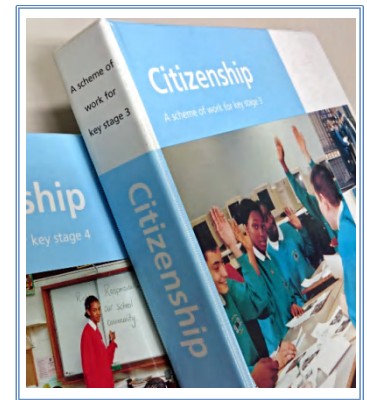
ここまで述べてきたように、地域安全マップづくりには、子供の景色解読力向上による犯罪未然防止の効果がある。登下校や習い事、遊びに行くときなど、子供は一人で行動することが少なくない。犯罪が起こりやすい場所では、子供自身が十分に注意・警戒することにより犯罪に遭うことを回避する。

なお、地域安全マップづくりによる効果も万能ではない。平成 25 年 6 月に練馬区立大泉第一小学校正門で発生した小 1 男児への切りつけ事件など、昨今は無差別な犯罪も増えている。いきなり襲ってくる犯罪者には、「大声を出す、走って逃げる、防犯ブザーを鳴らす」等、抵抗性を高める指導も有効だが、だましてくる犯罪者には、「だまされていること」に気付かせる指導をしなければならない。そうしたケースにも有効なのが、地域安全マップづくりによる景色解読力向上の取組である。

(2) 非行防止

犯罪機会論が主流な英国では、市民性教育が小学校から導入され、中学校では必修科目とされている。文字通り、子供を単なる保護の客体とせず、自ら主体的に社会に関わる、社会を担っていく人材に育てることを目指している。

子供の頃からそうした意識を芽生えさせようとしており、その一つに犯罪予防や非行防止がある。地域安全マップづくりには、次に示す「3つの絆」を育む効果があり、非行防止にも役立つ。



ア 人との絆

- ・地域安全マップづくりは、グループワークで限られた時間内に行う。
- ・一人一人に役割を与えることで、全員が関わり主体的に取り組む。
- ・各班は一番優れたマップを作ろうと夢中になる。日頃仲が良くないメンバーがいたとしても、マップづくりを通じて協力し合うことで良好な関係を築くことが期待できる。

イ 社会との絆

- ・フィールドワーク中、子供は地域の人へインタビューを行い、地域の危ない場所について情報収集するが、犯罪機会論を知らない地域の人から真の情報を収集することは目的としていない。
- ・インタビューの本当の目的は、「地域の人、知らない人も不審者ではない。いろいろな人がいるが、子供の安全を考えてくれている。」ということをお子さんに気付いてもらうことにある。
- ・子供もその地域が好きになれば、非行に走りにくくなる。
- ・地域の人、子供がまちの安全のため活動する様子を見て、「今度は私も手伝お

うかな。もっと頑張ろうかな。」と学校教育に対する支援体制を築ける。

ウ 未来との絆

- ・地域安全マップづくりは、子供による景色解読力の修得が目的である。マップ作製は不要ではないかと考える方もいるが、マップという成果物を残すことで、子供の達成感や自信、成功体験を目に見える形にすることができる。
- ・子供は通学のたびに廊下に貼り出されたマップを見て、その確認をする。
- ・地域の人を招いて発表会を行い「みんな頑張ったね、偉いね。」と言われると嬉しい気持ちになる。こうした経験が「次は何をしようかな。」というチャレンジ精神につながる。

(3) 学校、保護者、地域の連携促進

ア 保護者（PTA）との連携

犯罪機会論に基づく地域安全マップづくりを子供が学習する際、保護者(PTA)も積極的に関わり、補助員として参加することにより犯罪が起こりやすい場所と起こりにくい場所の見分け方が身に付く。

保護者(PTA)の皆さんには、その後も地域安全マップづくりの学習のお手伝いをいただくほか、日頃、校外活動としてパトロールや登下校見守りを行うときには、学習を通じて修得した景色解読力を効果的に活かした取組をお願いする。また通学路や子供がよく遊びにいく公園などで、「入りやすい」「見えにくい」場所が発見されたときは、改善に向けた取組について、保護者や町会・自治会、役所の担当部署へ相談する。マップづくりの活動を通じて、身近な地域のことをよく知る機会となる。



イ 地域（ボランティア）との連携



都内各地域には、登下校の見守り等を行う地域ボランティアの方が少なくない。

こうした方々にも地域安全マップづくりの事前学習やフィールドワーク等に参加いただき、趣旨や手法等について理解していただく。そうすると、その後も学校がマップづくりに取り組む場合、補助員として協力いただけるよう

になる。その地域で生活し、その地域をよく知るボランティアと学校、保護者が子供の安全をテーマにつながることができる。都内では、共働き家庭が多いという背景があることから、学校は地域の方に積極的に参加いただける関係を構築することが大切である。

また、地域安全マップづくりに協力いただくことで、子供と地域の方のコミュニケーションを深めることができ、日々の防犯活動にも生きてくる。子供の安全を考え、日々活動している大人へ元気に挨拶する子供も増えるだろう。

◆ 地域安全マップづくりを実施した学校からの手紙

この前はいろいろ教えてくださりありがとうございました。私は今後きけんな場所には行かないようにします。どうしても行かなきゃいけない時は集団で行ったり、まわりを見わたすようにしたいと思っています。私はHはんで、小宮先生についてもらいました。私達がまわりを見ていない時に小宮先生が「ここはきけんか安全なの？」ときいてくれてみんながどういう所は止まってきけんか安全かをはんだんできるようになってきました。小宮先生のおかげで家族にほめられました。本当にありがとうございました。(小4)

今日の地域安全マップづくりを経験して私は、危険地域の多さにおどろきました。調査したところは学校や駅、お店があってよく使う場所だったので、犯罪にあうかもしれないところがあると知って、最初こわいなぁと思いました。でも、私がもう少し注意をすれば犯罪にあいにくくなることも知り、細かいところにも注意をして生活していこうと思いました。

今日のことを通して他の人にもいつもより少し注意することの大切さを知ってもらいたいです。(小6)

「地域安全マップ作り」によって、子供の危機管理能力を高める大切さを学びました。また、それ以上に、教師としての日々の指導のあり方を考えさせられました。当たり前のように、「不審者には気をつけてね」と繰り返していた安全指導。これは、本当に危険な指導です。「人を見かけで判断するな」という教育の根本でもあるべき考え方と真逆のことをしています。ずっしりと、心に染みました。

これから、自分には何ができるかな……と考えてみました。学校で、安全マップ作りの必要性を訴えていくこと以外にも、教室や学校をきれいにすることの大切さをきちんとした理由をもって、子供達に指導していけるなと思いました。(教員)

8 大東京防犯ネットワーク

東京都青少年・治安対策本部では、都民や防犯団体等と地域の防犯情報を共有し、パトロールなどの活動に役立てていただくため、防犯ポータルサイトを管理・運営している。

本サイトは、平成 17 年度から運営しているが、平成 28 年 10 月に WEB-GIS（地理情報システム）を導入し、6つのマップにより、地域の防犯情報や東京都や区市町村における安全安心まちづくりの取組をわかりやすく紹介している。

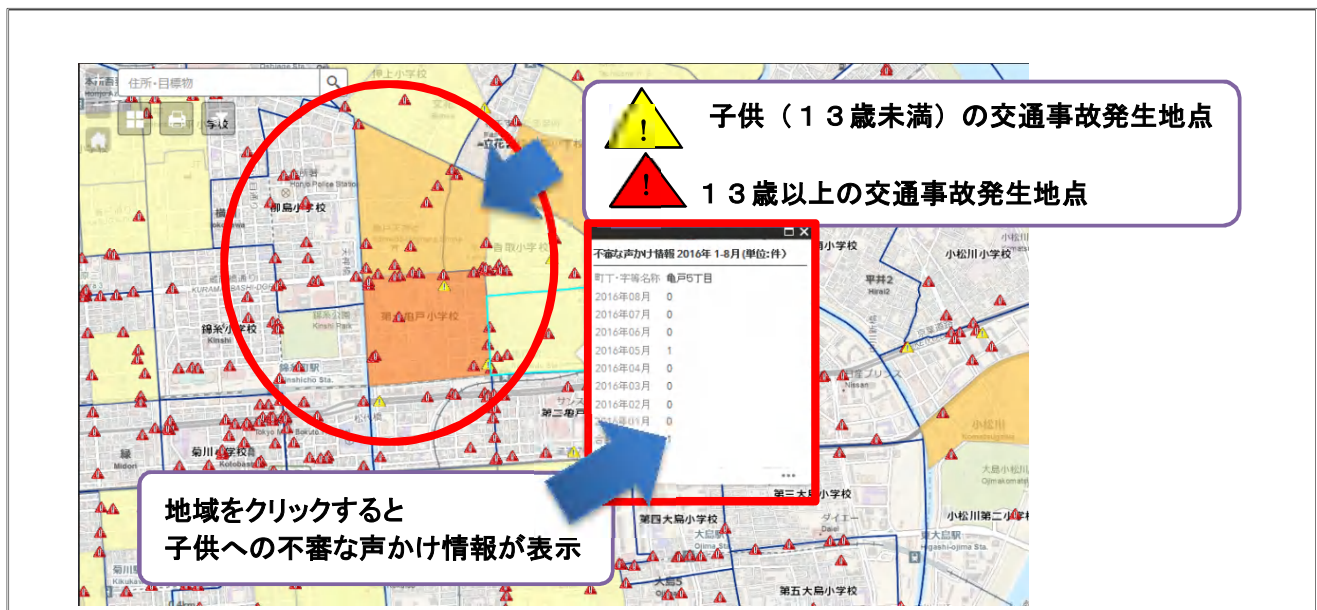


(URL : <http://www.bouhan.metro.tokyo.jp/>)

「①子供の安全マップ」について紹介

子供に関する情報がマップに表示されます。

交通事故の発生地点や、不審な声かけ件数を町丁字別色分けマップで表示します。



学校や児童館等の詳細情報も表示されます。

第二小学校

設置主体	調布市立
所在地	調布市国領町 4-19-1
児童数(総数)	358
児童数(1学年)	69
児童数(2学年)	71
児童数(3学年)	44
児童数(4学年)	55
児童数(5学年)	52
児童数(6学年)	67
児童数(再掲)特別支援学級	0
郵便番号	182-0022
電話番号	042-485-12
ズーム	

● : かけこみ 110 番
 ● : セーフティステーション情報
 ★ : 公園
 人 : 児童館
 校 : 小学校

グラフ集計もできます。

子供の安全マップ 東京都庁 青少年・治安対策課

グラフ集計(声かけ)

次のタスクアイテムの1つをクリックして、チャートを実行します。

- 〈最新1ヶ月〉最近発生した場所はどこ? >
- 〈2016年〉区市町村ごとに何件発生? >
- 〈2016年〉時間帯ごとに何件発生? >
- 〈2015年〉区市町村ごとに何件発生? >
- 〈2015年〉時間帯ごとに何件発生? >
- 〈2014年〉区市町村ごとに何件発生? >
- 〈2014年〉時間帯ごとに何件発生? >

選択エリアの不審な声かけ情報について、「〈最新1か月〉最近発生した場所はどこ?」をクリックすると・・・マップで場所を、グラフで件数を確認

パトロールマップも作成できます。

パトロールルートを手で作成できます。(距離・面積が自動計算) 地域の犯罪件数も確認できます。

自 「自転車盗」
 ひ 「ひったくり」
 住 「空き巣」等住宅への侵入窃盗
 声 子供への不審な「声かけ」等
 ※パトロールマップの作成は
 ④防犯団体活動情報マップ

企画 東京都青少年・治安対策本部 総合対策部 安全・安心まちづくり課
〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号 第一本庁舎北塔 34 階

協力 地域安全マップづくり指導マニュアル編集委員会

委員長 立正大学文学部教授 小宮信夫

委員 教育庁指導部指導企画課

委員 警視庁生活安全部生活安全総務課

委員 青少年・治安対策本部総合対策部安全・安心まちづくり課

